

503
83

事故本
落丁 P453-488
喜込外 P2.4
他多数
'93.8.23



始



503-83



義意的會社の庭家

著か市田山



社明文代近

目次

序 論 家庭の進化……………	(三)
第一編 婦人問題と家庭……………	(一七)
第一章 婦人問題の三大基礎……………	(一九)
第二章 文明の新基礎としての家庭……………	(三五)
第三章 家庭の危機に就て……………	(五四)
第四章 婦人の心理的創造力の解放……………	(六二)
第二編 戀愛と結婚……………	(七一)
第五章 新時代の戀愛と結婚……………	(七三)
第六章 結婚に對する現代人の態度……………	(八二)
第七章 愛・同情・貞操……………	(一〇一)

目次

第八章 新婦人と男性美……………(102)

第九章 婦人に對する最大侮辱……………(111)

第十章 自由結婚と見合結婚……………(116)

第十一章 新時代の夫の資格……………(121)

第十二章 男子の不貞操に就て……………(126)

第三編 婦人と教育……………(131)

第十三章 新社會の教育方針……………(141)

第十四章 婦人と社會奉仕……………(149)

第十五章 女子高等教育と出産率……………(158)

第十六章 女性の特質と女子教育……………(176)

第十七章 新しい母と舊い母……………(184)

第十八章 科學的態度の缺乏……………(191)

第四編 婦人と産業……………(205)

第十九章 女權主義者と産業王との對話……………(204)

第二十章 革命と人間性……………(219)

第二十一章 交換價值と使用價值……………(239)

第二十二章 能率の限度……………(250)

第五編 婦人と政治……………(255)

第二十三章 健全なる人生觀が現代政治の不安を一掃する……………(257)

第二十四章 婦人から政治家への要求……………(268)

第二十五章 民衆政治の基礎……………(280)

第二十六章 米國婦人の生活と婦人參政權……………(289)

第二十七章 婦人參政權の賛否……………(299)

第六編 母性の革命……………(305)

第二十八章 男性文明の末路……………(307)

第二十九章 男女關係と母子關係……………(311)

目次

目次

第三十章 母性に對する國家の義務……………(三五七)

第三十一章 産兒制限は人類を動物化する……………(三七二)

第七編 母性保護と新國民……………(三八三)

第三十二章 賣種族の事實……………(三八五)

第三十三章 軍備縮小と母性保護……………(三九三)

第三十四章 生命の新價值……………(四一九)

第八編 現代思想と責任觀……………(四二五)

第三十五章 社會生活と責任……………(四二七)

第三十六章 本能の跋扈から本能の征服へ……………(四三三)

第三十七章 禮儀の社會的意義……………(四四五)

第九編 家庭の使命……………(四四九)

第三十八章 家族制度と個人主義……………(四五二)

第三十九章 社會制裁機關としての家庭……………(四六三)

第四十章 家庭の奴隸より家庭の女王へ……………(四七〇)

第四十一章 人類の希望と婦人……………(四七五)

目次



家庭の社會的意義

序

論

家庭の進化

今日の社會制度のうちには、家庭、國家、宗教團體、學校、産業と云ふやうなものがありますが、これらは、皆、社會の批准を受け、社會から保護されてゐるものです。つまり、社會が認めてよしとしてゐる人々の結合した生活が即ち社會制度です。けれども、又、一方には社會の批准も保護もない人々の集團があります。そして、もし、人がさう云ふ集團に加はるならば、彼は社會の同情を失ひ、擯斥されます。それ故、昔から、先づ、普通の人は自分の屬する社會がよしとしてゐる方法で集合したり活動したりしてゐました。そして、同じ習慣が何年もくく續いてゐるうちに其れが結晶して、一定の形式の社會制度となつたのです。けれども、時代により、國によつて其の發達の程度に差があつたのは勿論のことです。

ですから、其等の諸制度の歴史的の糸は随分遠い過去に迄跡付けて行く事が出来ます。異つた時代、及び、異つた國民が皆それらの特殊な環境と社會遺傳に従つて其等の諸制度の根本

的基礎を造つたのです。それ故、遺傳と環境は社會進化に於ける二大要素であつて、其れが社會制度の根となつてゐます。以下、其れに就て少しく調べて見たいと思ひます。

第一義の、そして、最も重要な社會制度は家庭です。ですから、社會の單位と云はれるものは個人よりも、むしろ、家庭です。社會に於ける家庭は、丁度、生物學に於ける細胞が凡ての有機體の發達の核であるやうに、社會の發達の核が家庭です。又、家庭は小社會とも見られまゝす。家庭には男女兩性があつて生殖は營まれるし、又、多くの場合、老人、幼年者をも含有して居るものですから、凡ての社會關係が既に其處に存在してゐます。ですから、私共は家庭を社會の第一義的の形式と云ふのです。他の社會制度は皆此處から發達したものです。

家庭は最初の産業社會でありました。夫は狩獵に行き、妻は家に居て食物を用意し衣類を造つたのでした。今日に於ても、新開地へ行くならば、各家庭は實際上獨立の經濟單位です。なぜなら、生活の必要品の殆ど凡てを各々の家庭で造つて行きます。宗教生活も家庭を中心としてゐました。家長制度に於ける父は第一の高僧でありました。そして、カトリックが禮拜場でありました。子供の教育は母の膝の上で始められました。ですから、學校制度は家庭が既に始めてゐた

仕事の繼續です。又、國家と云ひ政府と云ひ皆家庭制度を延長したものです。其處で、家長なる者が彼の一家の各員の行爲に關しては國家に對し責任を擔つて居たのです。

家庭の第一義的作用は種族の繼續です。昔の産業的作用は家庭から工場へ引き移されてしまひましたし、そして、學校やいろ／＼の宗教團體が家庭の教育的及び宗教的生活の代りをしてゐますが、併し、家庭の第一義的、即ち、生物學的作用は社會にどんな變化があつても決して變りません。實に、家庭は新しい社會員を創造し成長させる社會制度です。種族の生命を代傳へて行く此の第一義的の家庭的作用は人間種族の有る限り永久です。

それから家庭の第二義的作用は社會的の財産を次代に傳へて行くことです。そして、其の社會的財産には、精神的財産と物質的財産とがあります。物質的財産とは勿論有形な富を云ふので、精神的財産と云ふのは國語、宗教、政府の理想と云ふやうなものを云ふのです。それ等の社會的財産を傳送することを社會化の過程と云ひますが、つまり、家庭に於て生れた子供を社會的生活に適應するやうに養成することが家庭の第二義的作用です。要するに最も廣い意味に於ての國民の養成と云ふことです。けれども、家庭に於ける此の義務は、今、だん／＼忘れ

られようとして言います。そして、學校や宗教團體が補助しなければ由々しい危険に陥りさうになつてゐます。

一體、家庭は幼兒を保護するための自然の工夫であるとしてよいのです。最下級な動物には雌雄と云ふ物がなく、分裂繁殖によつて種族が繼續されてゐます。そして、少し高等になつて來るに従つて性の別がはつきりして來ますが、それでも猶兩性の結合は唯一時的であつて、生殖のみが目的です。従つて、生みつばなしで、子の世話をしようとはしません。ですから、種の繼續は機會に任せられてあります。其の代り子の數は莫大なものであつて、先づどんな境遇に出くわしても幾分かは生き残つて種は繼續されるやうになつてゐます。此の例は魚類によつて最もよく示されてゐます。鳥の生活になると餘程發達して來て、其の生活は家庭の形式を備へて來ます。第一、卵が孵へる迄は親鳥の注意が必要となつてゐます。そして、雌雄の同棲も一季節の間は續きます。

哺乳動物になると子に乳を吞ませます。従つて、注意の度も多くなるし、時間も長くかゝるし、雌は餘程骨が折れるやうになります。其處で、雄が雌の食物を運んだり、母子を保護した

りします。大抵の場合、子が成長してしまふ迄雌雄は一所に生活してゐます。これが最初の共同生活で、此處から家庭と云ふものが發達しました。

動物がより高等になるに従つて、子供の時期はより長くなり、兩親の共同生活がより長くなつて來ます。人間に近い高等動物、たとへば、ゴリラや猿の如きは一夫一婦の生活が普通となつてゐます。ですから、比較的永久的な家庭を造つてゐます。實に一夫一婦の家庭制度は人間以前の動物のうちに迄跡付けることが出来るのです。

初期の人間の兩性關係は非常に混雜してゐて、はつきりした家庭の形式は備つて居なかつたと或る社會學者は云つてゐますが、併し、高等動物の生活に徴して見ても、人間は矢張り、原始時代から家庭を造つて居たやうに思へます。又、今日の最も原始的な生活をしてゐる野蠻人でも一夫一婦制をとつて比較的強固な家庭生活をしてゐます。科學的に確立された其れ等の理由から、私共は原始時代の人間も可なりに永久的に確定した一夫一婦の家庭を造つて居たと信ずることが出来ます。

けれども、家庭の形式はいろいろありました。米國の土人、イロコイ族のやうな社會を研究

して、母系制度と云ふものが發見されました。つまり、一家の権力や財産が母を通じて子に傳はるのです。子供は母の名を襲ひ、母の家に屬してゐました。で、酋長は自分の権力を自身の子息に譲るのでなく、娘の子息、つまり孫に譲つてゐました。母に重きを置く此の形式が母系組織です。で、これは、大抵の社會が一度は必ず通過して來た制度の代表的なものです。

そして、此の母系組織は、父子關係がほんやりしてゐるに反して、母子關係が明らかであつた時代に始まつたものです。父と子の關係は時によると曖昧であるに反して、母と子の關係は明瞭であつたからです。其の頃の女の位置が高かつたことは勿論です。

母系組織が父系組織に移り、男の子が相續するやうになり、夫、及び、父が最上權を持つやうになつたに就ては多くの原因がありました。戰爭は、他種族の女を捕獲して妻にすると云ふ習慣を造りました。其の次には妻を買ふと云ふ、捕獲するよりは餘程平和的な習慣が出来ました。現存する野蠻人のうちでは今でも妻を買ふと云ふことが、普通で、もし、買はれた其の妻に子供が無い場合、又は、妻の勞働力が貧弱である場合には賣主なる父から一度拂つた金を取り返して、そして、妻を父に返すと云ふ習慣もあると云はれてゐます。

父の手から娘を買つて妻にすると云ふ例は舊約全書のうちによく現れて居ります。ヤコブはラツチエルを得ようとして彼女の父のために七年間の勤勞をしてゐます。戰爭が女を捕獲すると云ふ習慣を造り、次には、女を賣買すると云ふ習慣が出来た外に、もう一つ女の位置を低くした状態は游牧生活だつたと云はれてゐます。此の生活は移り歩く範圍が廣いので、女は生家を出た後には、もう生家の保護を受けることが出来なくなつたからです。

家長制度に於ては、父が妻子に對して絶対の権力を持つて居ました。生死の権力迄も持つて居たのです。けれども、人類の進歩は、父に其の権力を附與した家庭の形式を破壊して、そして婦人と子供の位置を高くしました。

異族結婚と同族結婚と云ふのが一度ありました。異族結婚とは、男が他種族の娘を求めて妻とする習慣であり、これに反して、同族結婚とは自分の屬する種族の娘と結婚する習慣です。けれども、生物學上の理由から同族結婚には度々有害なことが起りました。恐らく、自然淘汰は異族結婚に左袒して居るのでせう。そして、此の異族結婚が同族結婚よりもより、普通な習慣となりました。けれども、此の異族結婚は他種族の女を捕獲する習慣から來てゐるやうな形跡

があります。一度は他種族の女を捕獲すると云ふのが一般でありましたから。そして、今日の或る地方に於ける結婚の儀式のうちには、夫と定められた男が花嫁を掬つて行く、かたちがあります。

又、複数結婚と云ふことがありました。そして、此の複数結婚制度は三つの形式の家庭を造りました。つまり、妻が複数である場合、夫が複数である場合、或ひは、又、両方が複数である場合です。たとへば、布哇の或る地方では、此の両方の複数結婚が行はれてゐます。男の幾人（大抵は兄弟）か、女の幾人（大抵は姉妹）かと結婚します。そして、其の男女の一群の中の各々の男が各々の女の夫であるのです。しかも、其の一家族の結束は固く、其の家庭内では其の時々の氣分に従つて、どの男とどの女とが關係しても其れは神聖なものとされてゐます。

一妻多夫制度は例の少ないものですが、それでも、前述の多妻多夫よりも澤山あります。これは幾人かの男（大抵は兄弟）が一人の女と結婚するのです。此の好き例は西蔵チベットにあります。そして、さう云ふ形式の生活がどうして出来たかと云ふと、此の地方の土地は不毛で、食物が少ないために、人口を殖やさない工夫だと云ふことです。それから、もう一つの理由は女の子

が生れると直ぐ殺してしまふ習慣があつたために、女の数が男と比例して非常に少ないからだと云はれてゐます。

一夫多妻の制度は文字通り、一人の男が幾人かの妻を持つことです。此の種類の家は經濟上の餘裕が必要です。原始時代には經濟上の餘裕がなかつたために、かう云ふ形式の家は到底不可能だつたのです。實に、今日において、所謂一夫多妻は富者階級によつて行はれるます。土耳其や埃及に於ける回々教は一夫多妻を許して居ますが、併し、全人口のやうやく五分弱しか其れを實行してゐません。と云ふのは両性の数がほぼ一致して居るので——戦争が男子の数を減じて行く場合を除いては——一夫多妻は一般には實行しようとしても出来ないのです。

妻を捕獲したり、買つたりしたことが、確かに一夫多妻主義を促しましたが、家長制度に於て、重要視された相続人として實子を欲求したことも亦一夫多妻主義の發達を刺戟しました。

一夫一婦制度は凡ての時代、凡ての國に於て行はれた結婚の形式であります。他の結婚の形式、たとへば、複数結婚、一妻多夫、一夫多妻は地方的であつたり、又は、一時の變則的形式

であつたりしたのに反して、一夫一婦は普遍的でありました。そして、他の形式は皆此の一夫一婦制から逸脱したものです。又、文明國に於ても、此の一夫一婦が普通です。且つ又、これが今日に於ては社會の批准を受けてゐる結婚の形式です。

道徳的に見ることから離れても、此の一夫一婦制度が他の制度に優つたものであると云ふことは社會學上いくつかの理由があります。他の形式よりも一夫一婦制に於ては、第一、子供の養育が行きとよみます。嬰兒の死亡率は一夫一婦制の場合が最も少ないと云はれてゐます。

又、家庭の第二義的作用、即ち、個人を社會化する作用は一夫一婦の家庭に於て最も完全です。一妻多夫又は一夫多妻の家庭に於て、必ず起る嫉妬の代りに、一夫一婦の家庭に於ては最も高尚な愛情の發露となり、其れが利他主義の養成となります。歴史に於て、一夫一婦の家庭制度と高等文明の發達とが必ず關聯してゐたと云ふことは決して偶然の出來事ではなかつたのです。實に、一夫一婦の美しい愛情が利他主義を養成し、共同的精神を發達させ、文明を促進させたのです。圓滿であつて、健康的な家庭生活が、直ちに平和な健全な國民生活でありますから。

初期の羅馬が道徳的に健全で、國家として強固であつたことは、羅馬人の家庭生活が道徳的で堅固であつたからです。けれども、後の羅馬は奢りと惡徳が盛んになり、家庭の破壊となりました。同時に羅馬帝國の没落となりました。ですから、私共は、離婚數と嬰兒死亡率の増加及び、出生率の減退によつて、一國の衰頹を讀むことが出来るのであります。

第一編 婦人問題と家庭

捨て、置けば忽ち呼吸が絶えさうないくちの赤子に、胸をひろげて乳房を含ませた第一の女が、凡ての文化の母であります。

自然は母と子に親密な關係を造つて置いたことによつて、女性の心に利他主義の芽を植ゑつけました。

何代もくの間母達が其の利他主義を實行した、優しい犠牲を拂つたことによつて人間は盲目な無意識のくらやみから明るい有意識の光の中へ躍り出ました。

世界平和の基礎となる利他主義の源は母にあります。女權の復興とは母性の復興の別名でなければなりません。

第一章 婦人問題の三大基礎

一體、婦人問題とは何でありませうか？ 此の婦人問題の定義を下すことはなかなか、難しいことでもあります。なぜなら、婦人問題に對する考へは十人十色、百人百色であつて、これと云つて、まとまつた、定まつた考へはないのであります。従つて、一定の定義はなく、婦人問題を取り扱ふ人々が、皆それ／＼に自分免許の定義を持つてゐると云ふ始末です。

けれども、區々な考への其のうちに自らなる共通點があります。其の共通點をとつて擧げて見ますと、かうなります。

『今日迄の法律と習慣は婦人に人間としての自由を拒んでゐる。人爲的な障礙物が人としての婦人の發達を阻害してゐる、故に、其の障害物を破壊しなければならぬ』と、云ふのが、先づ、今日の全世界の婦人運動の基調となつて居ます。

つまり、婦人の發達と、婦人の自己實現を阻害するすべての障害物を取り除け、人としての

自由を得ること。そして、此の人生の旅に於て、自分の歩む道は他人から與へられるのではなく自分自身で選ぶ機會を與へられねばならぬこと。それを妨げる法律と習慣は片ツばしから壊して行かなければならないと云ふことが婦人論であります。この思想が婦人論者達の論文に講演に絶えず現れて居ます。要するに、婦人の人としての自由を得ること、つまり、經濟上、法律上、又、結婚上、男子と同じやうな機會を得ようとするのであります。

確かに、一般婦人論の基礎觀念は、今日迄の婦人のやうに親に従ひ、夫に従ひ、後には、子に従ふと云ふやうなものではなく、一人格者としての自由を婦人に與へよと云ふのであります。同時に、婦人自身の自覺、婦人自身の自尊心の回復が婦人運動の主眼となつて居ます。

其處で、此の婦人問題は、生理に基礎を置いたものと、經濟に基礎を置いたものと、それから、社會學的の見地から、母性に基礎を置いたものと三つあります。そして、私は、生理に基礎を置いたものと、經濟に基礎を置いたものとを排して、社會學的の見地から母性に基礎を置いた婦人論をとつて居ます。其の理由を次に述べて見ようと思ひます。

生理に基礎を置く婦人論は『女だからと云つて、男と別に違つた處はない。女も男も同じ人間である。男と同じ人間である女に對して、別な習慣や法律を造つて置くのは不都合である』と主張して、男子の特長となつてゐるものを、訓練によつて、婦人にも持たせようとするのであります。學問に於て、運動に於て、職業に於て、政治に於て、男子と同じやうな活動を婦人に許せと主張するのであります。そして、女性としての生來の傾向や、作用を認めずに、一途に、男子との競争に於ける公平な立場と、政治上、社會上の同等な權利と、教育、及び職業上の同等な機會と、男子と同等な道德の標準を要求したのであります。

かう云ふ種類の婦人論が世界中に流行してゐた時に、勃發した歐洲の大戦争は、其の女權主義者達に都合のいゝ機會を與へました。戰場へ行つてしまつた男子に代つての婦人達の目ざましい働きは女權主義者達に都合のいゝ口實を與へました、歐米の女權主義者達は勿論のこと、我が國の女權主義者達も、皆、聲を揃へて、婦人が埠頭人足になつたとか、飛行機の組み立てをしたとか、兵士と行動を共にして器械を運轉したとか、やんやとほめたゝへて、それ見たことか、婦人だからと云つて、決して、男子に劣るものではない。よろしく男女の差別を撤廢すべしと叫んだのであります。

けれども、私は、それに對しては不愉快な氣持を持つてゐました。なぜなら、火事が起つていよ／＼自分の家へ火がついた時には、平生は少しも力のない人でも、兩手に一枚づゝ疊を下け出すことが出来ること云ふやうなことを聞いてゐましたが、戦時中の婦人の働きは其れに類したものであらうと云ふやうに私は考へました。

幸か不幸かの運命が分るゝ處に立つた時、又は、死ぬか生きるかの危急な場合ひに遭遇した時の行爲が永久に続くものであるかどうか。さう云ふ非常な場合の行爲を、平生の行爲の標準として差し支へないものであるかどうか。又、それが、かりに可能だとして、果して、それが婦人自身、並びに、男子や子供の幸福であるかどうか。私は大きな疑問を持つてゐました。

婦人には、男子には全くない、烈しい労働に不便な生理上の障碍や、妊娠、哺乳と云ふ大役のあることを忘れて、男女同等説を説く、無知無謀に私は驚いてゐました。

我が國の女權主義者のうちにも、農業地や漁業地や、その他の労働階級の婦人達が男子と同じやうに烈しい労働に服してゐるのを見て、其れを標準に、婦人も男子と同じやうに働けることの證據としてゐる人があります。併し、果して、さう云ふ烈しい労働に従事してゐる婦人達

が次代の養成者として、つまり、次の國民の母として價値ある素質を備へてゐるかどうか、これは大いに考へて見る必要があります。私の見る處では、それ等の婦人達は、烈しい無理な労働を始終續けてゐるために、國民の母として豊かに持つてゐなければならぬ女性の特質である、やはらか味と、あたゝかさを、其の肉體からも心からも絞り取られてしまつてゐます。甚しきに至つては、生理上、不具になつてしまつてゐます。

かう云ふ婦人が生み、且つ、育てた子供が果して、有力な國民と成り得るものでせうか？男子の労働は文字通りに、唯、労働を賣るだけですみます。けれども、種族的の責任を負うてゐる婦人の烈しい労働は、女性としての作用を衰弱させ、時には、全然破壊してしまひます。それだけ、次の國民の力は衰弱させられ、破壊させられるのであります。

かう考へると、生理の上に基礎を置く男女同等説は男子の壓制に逆上した女權主義者の迷ひであり、迷ひであるから、全然失敗であると云ふことが明らかになります。

そして、生理上に基礎を置く男女同等説が破れたとしますならば、従つて、經濟上に基礎を置く男女同等説も立たないことになります。

（經濟に基礎を置く）女權主義者は、今日の男女の不平等は婦人に經濟上の力がないからである。婦人が經濟上の力を持ちさへすれば、男子の横暴などは、すぐ、押へつけてしまふことが出来る。と云ふ考へから、婦人の職業を盛んに鼓吹したのであります。そして、婦人の職業範圍はだん／＼擴つて來ました。そして、女權主義者や、新聞雜誌は、それを婦人の解放だとか、婦人の權利伸長だとか云つては、やし立てゝ居ます。

けれども、知的勞働にしろ、體的勞働にしろ、婦人が採用される主なる理由の一ツは男子よりも婦人が安く使へるからであります。父か夫のために家庭で働いて、父か夫から衣食の料を貰ふ代りに、資本家のために働いて資本家から衣食の料を、しかも、不充分に貰ふに過ぎないので、決して、それは解放でも權利の伸長でもありません。

一度、英國の女權主義者は、男子勞働者と婦人勞働者の間に賃銀の差があるのは、不公平極まると主張しました。そして、其の主張は遂に通つて、男女の賃銀率は同じと云ふことになりました。處で、男子にも女子にも同じ様な賃銀を拂はなければならぬやうになると、雇主の側では、同じ賃銀なら面倒の少ない男を雇はうと云ふことになつて、婦人を雇ふものが無くな

つたので、女權主義者達はあはて、又、婦人の賃銀を男子のよりも下けて貰ふことに運動したと云ふ話があります。それにも拘らず、此の經濟に基礎を置く婦人論は、今猶世界到る處に優勢でありまして、此の種類の婦人論者は婦人が工場や、商店や、會社に働くことを頗りに謳歌してゐます。其の生活がどんなに貧弱で、無價値で、悲惨であつても、唯、賃銀のために働くこと云ふことが有意義であり、立派なことであるやうに思つてゐます。そして、それが經濟上の獨立であるとか、其の經濟上の獨立が男子の横暴に對する最善な武器であるとか、さうしてのみ、長い間の服従から、即ち、單なる女性としての位置から婦人を解放することが出来るとか云つて、其處から起る悲惨な事實や、禍に就いては目をふさいでゐるやうな始末です。

女權主義者達が理窟の上で、どんなに本當らしいことを云つた處が、妊娠、哺乳と云ふ重大な役目が男子になくて女子にのみある以上は、經濟的の勞働に於て斷じて女は男と競争することとは出来ません。ですから、經濟に其の基礎を置く婦人論は、生理に其の基礎を置く婦人論と共に早晚壞されなければならぬものであります。

それならば、生理上、經濟上、男子と競争出来ない婦人は男子よりは劣等な人間であるかと

云ふに決してさうではありません。男子に都合のいい、男子に適した立場に婦人を置かうとするから、婦人が劣等であるやうに見ゆるのです。男と女と同じ仕事をさせ、競争させることは丁度、海の仕事に慣れた人間を山へ連れて来て、山の仕事に慣れた人間と競争させる様なものです。てんで、競争にならないのであります。海に働くべき人間を山へ連れて行つたならば、其の人の能力は山の人間よりは劣等です。又、山に働くべき人間を海へ連れて行つたならば、其の人の能力は海の人より劣等でありませう。

其れと同じで、男と女と云ふ、もと／＼違つてゐるものを男に都合のいい立場に立たせるならば女が劣等であるのは餘りに當然であります。けれども、もし、婦人が男の眞似をして男との競争と云ふ立場でなく、婦人としての立場に立つならば、丁度、海に働くべき人間が山へ行つて、みじめな目に逢ふことの代りに、自分の領土である海へ歸つて働くやうに、婦人が女性の使命と云ふことに目覺めて、女性獨特の仕事にはけんたならば、此處では男子が眞似をすることの出来ない能率を上げることが出来ます。

けれども、今迄、婦人の此の貴い使命、男子が競争したくも、男子の入ることの出来ない婦

人の此の領土は無視されない迄も輕視されてゐました。其處から、あらゆる禍がかもされてゐました。人種の墮落、風教の亂れは重もに女性獨特の使命が輕視されてゐた結果であります。女性の意義、其の重大な使命が認められてゐなかつた結果、腕力のみが優勢であつた結果、腕力の劣つた婦人は腕力の優つた男子から、『酒と女』と云ふやうな一種の娯樂器、又は道具のやうに取扱はれるやうになりました。何事に就いても男子を本位とし女性の作用が次の時代に及ぼす影響に就いて、其の嚴肅な意義に就いて少しも考へられない結果、婦人は全く男子の奴隷になつてしまひました。

其の屈辱的な位置を脱するため、女權主義者は婦人の經濟的獨立を叫び、現に其れを實行しつゝあるのですが、それがおかど違ひであり、失敗であることは前述の通りであります。

其處で、婦人には男子とは全然違つた使命があり、異つた作用を備へてゐると云ふことを、婦人自身が自覺し、そして、男子がそれを認めた時に、婦人の社會上の位置は男子に優るとも決して劣らないものになります。即ち、これは母性に基礎を置いた婦人論であります。

エレン・ケイは申しました。『人間の意志は動物や植物を改良し一層高尚な型を造り出すことに成功してゐるが、併し、人間自身のことになると、今、猶、偶然と云ふことが信じられてゐる。』と、又、ラスキンは『我々人間はあらゆるものを造る。我々人間は木綿を晒したり、鋼鐵を堅めたり、研いだり、砂糖を精製したり、陶器を造つたり、又は、書物を印刷したりする。けれども、我々人間は我々の生きた心靈を改造し、精製し、磨き上げることを考へない。』と。

けれども、婦人の母性と云ふことが認められ、尊敬され、保護された時に、即ち、ものを造ることは、人を造ることの單なる手段であると云ふことが認められて、母の作用と職務が、人生のあらゆる仕事のうちで最高價值のあるものと云ふことが國民の信仰となつた時に、エレン・ケイの云ふ高尚な人間の型を造ることや、ラスキンの云ふ心靈の改造の仕事が始まります。男との競争が許されない、此の母性の價值が認められた時に、婦人に關するあらゆる問題、即ち、女子教育問題、職業問題、結婚問題、財産の所有問題、参政權問題の解決に鍵が與へられたことになるのであります。

婦人問題に對する批評の時代は、もう過ぎて、今は、實行の時代、即ち、運動の時代に這入

つてゐることは、世間の先覺者達が既に承知してゐる事實であります。併し、婦人の生活の根本となるものを忘れてゐて、單に枝葉の事柄を取り扱つてゐたのでは、いつ迄たつても満足な解決は得られないと私は思つてゐます。そして、其の根本となるものは母性の價值であつて、其の他の教育問題、職業問題、結婚問題、財産所有權問題、参政權問題は、其の枝であり、葉であると私は信じてゐるのであります。

曾て、人間が此の地球の上に建設したもののうちで最高價值のあるものは此の社會と云ふわくを造つたことであると或る社會學者は申しました。そして、此の社會と云ふわくは男が造つたものであります。けれども、此の社會が、決して、完全なものでないと云ふことは誰でも知つて居ます。何故不完全でありませうか？

これは、わくは出來たが其の内容が充實してゐない。内容がフラク／＼であるから、其のわくがあつちへフラク／＼こつちへゆらく／＼してゐるのであります。其處で、其の内容を充實させてつまり、其のわくの中へ這入る人間を堅實な優良なものとするためには、第一、婦人の女性としての自覺、並びに、其れに對する男子の理解であります。

どんなに男が威張つても、男の生活に女が加はつてゐないならば、男は決して幸福でないと同じやうに、女がどんなに頑張つても、男の理解と男の補助が無かつたならば、婦人は婦人としての使命を完成する事は出来ません。男子も女子も此の點に氣が付いて、第一には自分達の幸福、延いては社會の内容を充實させるために優良な子供を社會へ送り出す事に共力し、融合するまでは、どんなに政治の、かたちが變つても産業が發達しても本當の幸福は得られないと私は信じて居ます。

つひ、此の頃迄、英米の婦人論者も、主に、經濟と政治の方面に婦人の權利を發展させようとして、經濟の獨立とか、參政権の獲得とか、高等教育の要求とか云つて騒いで居ましたが、此の頃になつて、それ等は單なる手段、婦人としての生活の最終の目的を達する單なる道具であると云ふ處に氣がついて來ました。けれども、さう云ふ處に氣が付いたのは、極く、少數で、一般には、まだ、政治上、産業上の男女の平等を目的としてゐます。

婦人論の生物學的、即ち、生理的の基礎は、女權主義者の主張に反して、結局、婦人は男子より劣つてゐるものではないが、併し、同じものでないと云ふことを益々明らかにしてゐます。

又、經濟學的、即ち經濟的の基礎を研究して見ると、これも、女權主義者の考へとは反對に、男子が生産者であつて、女子が消費者であると云ふことがあらゆる方面から立證されます。

其處で社會學的基礎の上に載つてゐる母性から出立した婦人論でなければならぬと云ふことになりません。

今日の社會が必要とするものは、より多く生産すると云ふこと計りではありません。より多く生産すると同時に、愛をより豊富にしなければなりません。此の愛の力が社會を動かす半分の力、衣食の料を得ようとする力が、もう、半分の社會を動かす力であります。此の二つの力を聯合させるものは家庭であり、そして、其の家庭の中心は母であります。

文明の發達は家庭が基礎であり、そして、其の家庭は人間の二大本能、生殖慾と親たるの本能から成立するものであると云ふことは社會心理學者が既に認めて居る處であります。

實際、母、子供、家庭を中心として集つて來る優しい情緒から、社會正義、社會奉仕と云ふ觀念は生れました。子を思ふ親心、親を思ふ子の心が人道の源となつて居ります。戦争が人道化されたり、救濟事業が盛んになつて、幼年、老年、病人を保護する機關が設定されたり、動

物愛護の精神が普及されたりするのは、皆、人道的な衝動から始まつたもので、そして、其の
人道的な衝動とは、要するに、子に對する親心、親に對する子心の發現に外ならないのであり
ます。

ですから、どんなに新しい社會改革案も、どんなに立派さうな婦人の進歩も、もし、それが
男女の間の及び親子の間の愛情を稀薄にするものであつたならば、それは決して私共の幸福の
増進にも、本當の進歩にもならないものであります。

個人主義に出生した女權主義の普及と、機械産業の發達とは、婦人を家庭の外にどんく引
つばつて行きます。そして多くの婦人は單に家庭を出ることが婦人の進歩であるやうに思ひ違
へてゐることは前にも申しました。

無数の水源から集まつて來た川の水が、今、非常な勢ひで西を向いて流れて居る時に當つ
て、其の方向を急に東に向けようとしても恐らく其れは不可能でありませう。又、中にはいや
もおうもない、つまり、いやでも職業に従事しなければならぬ事情の下にある婦人もありま
せう。

併し、それが正しい進歩の道であるか、それとも一時の止むを得ぬ假りの生活であるかどう
かを知つて置かねばなりません。又、餘裕あり、思慮あり、經驗ある婦人が社會的の仕事に、
或ひは、職業に従事することも決して不都合はありません。けれども、その餘裕を持たない婦
人が、家庭を全く等閑にして置いて、經濟的勞働に、又は、社會的の活動に精力を費し盡すこ
とは個人の立場からも、社會の立場からも本末を顛倒した無駄な努力であります。

經濟的の勞働に従事するよりも、家庭的の勞働が自分の子供の、夫の幸福の増大となり、延
いては社會の幸福の増大となる處に氣付いたならば、自然、主婦は夫の収入だけで家計を營み
得るやうに工夫を凝らすやうになりませう。そして、其の結果の勞働婦人の數の減少は男子勞
働の價が高くなることになりませう。

又、社會的活動に興味を持つ婦人は、社會改良は各家庭から始まらなければならぬことを
承知して居なければなりません、そして、自分があまたの社會的の仕事をして自分も常に家
庭を外にするため、自分の子供達が濫い輝やかしい家庭の空氣を持たない結果、不良性を帶び
るやうになつたり、夫が不満の結果、家庭の外に娛樂を求めらるやうになつたのでは、結局、自

分の活動の結果、社會に改良があつたか無かつたかも分らない先きに禍の種をどんく製造してゐると云ふことになりませう。

更に、一言述べたいのは、女權主義者の云ふ婦人の自由とか、獨立とか云ふものは、今日の法律や習慣が男子に許してゐる自由であり、獨立であるといふことです。けれども、其の自由と獨立を持つてゐる今日の男子の生活が完全に幸福であるかと云ふと、私は、決して、さうでないと思ひます。それならば、婦人が大騒ぎしてそれを得た處が仕方がないと思ひます。

本當の意味の自由と云ひ、獨立と云ふものは生れるものであつて、獲得すべきものではないのです。なぜなら、自由と云ひ、獨立と云ふものは、唯、關係に過ぎないものです。關係だと云ふ證據には、絶對の自由だとか、絶對の獨立だとか云ふものはない。必ず、或るものに制限されてゐます。ですから、政治上で云ふならば被治者と治者との圓滿な關係、社會的に云ふならば、男女の本來の立場に置かれた男女關係、其の關係のうちに自由と獨立があるのです。

ですから、女が男性化したり、男が女性化したりしたのでは圓滿な關係がなく、女が女らしくあり、男が男らしくあることによつて、凡ての關係が圓滿になり完全になり、其處に自由と

獨立があるのです。

要するに、私の婦人論は社會學の見地から、母性に基礎を置いて、優秀な國民を造ることが、人間の仕事のうちで、最大重要なことを主張し、そして、此の仕事は男女の分業によらなければならぬものでありますから、其れに就いての男子の理解と、婦人の自覺を促すものであります。

一言で申すならば、一般の婦人論が婦人を男子から獨立させ、家庭の外に出さうとするに反して、私は、男女の生活のかたは此のまゝでよろしい。これを壊してはならない。唯婦人が婦人としての重大なる使命を自覺し、其の使命を果し得る資格を造ることに努力し、同時に、それに対する理解と同情と尊敬とを男子側に求むることを主張するのであります。

第二章 文明の新基礎としての家庭

前章に於て述べた通り、婦人間題、又は、婦人運動の起つた原因は男子中心の社會、法律も

習慣も一切が男子本位に定められてあるのに對する反抗でありました。男は女より大きく、力も強く、腦も重く、その他、身體の構造が男は女より優れてゐる、従つて、あらゆる學問、技術、藝術に於て、男が女に優れてゐる。此の社會での有益な仕事は、皆、男子がするのであり女は、唯、男子の世繼ぎを造る道具に過ぎない、子を生む以外の女の仕事は、いはゞ子を生むことに附随したものである、と云ふ思想に反抗したものが、實に、婦人運動の始まりでありました。昔の何かを讀みますと「お腹様」と云ふ言葉があります。私は好奇心にかられて、辭書を引いて見ました處が、それは、「貴人を生みたる婦人の稱」としてありましたが、實に此の種類の婦人こそ徹頭徹尾、男子の世繼ぎを造る道具で、彼女の存在は文字通り腹計りでありました。

彼女の考へ、彼女の日々の行動の凡てが、皆、子を生むことに附随したものの、つまり、自分を所有する男の歡心を買はうとするものでありました。そして、これは、男子中心の思想を遺憾なく發揮してあます處のないものであります。

尤も、これは、正妻でない婦人を指して云つたもので、正妻の方は腹以外の部分もいくらか

は認められて居た様であります。それでも、猶、要するに人として且つ又母としての何等の權利も與へられて居りませんでした。矢張り、腹は借り物と云ふ思想に支配されて、其の位置は何であれ、婦人は皆男子のための道具でありました。そして、この状態は西洋でも東洋でも同じことでありました。

其の不條理な状態に婦人が氣が付いたのは、佛蘭西で、時は千七百年代でありました。一七八九年の佛蘭西の大革命はルソーの云つた「平等なる人間が自由に契約して成つてゐる此の國家社會は全く自由と平等を基礎として組織しなければならぬ。」と云ふ思想の醗酵、其の爆發であつて、そして、其の佛蘭西革命の餘波は歐洲全體を動搖させ、舊文明を根本的に破壊しようとしたのであります。其の時に、一部の婦人が徐々と目を開いて、「男子と男子の間に不平等があるのが不正だと云ふならば、男子と女子の間の不平等も矢張不正であらう」と考へるやうになりました。

そして、忽ち、佛蘭西に於ては、オリンプ・グージと云ふ婦人が「女權の布告」と云ふ書物を發表して、「婦人は斷頭臺に登る義務があるのに、何故、政治に參與する權利がないか？」と云

ふ筆法で、婦人の政治上の権利を主張し、其の翌年は、英國に於てメリー・ウォールストンクラフト女史が「女權の擁護」を出版しました。其の主張の骨子は婦人市民權と同時に女子教育の要求であつて、「人類の半數である婦人が無教育であり、自由が無いのでは人類の進歩は半分しか遂げられない。」と云ふのでありました。

此の外にも婦人問題に貢献した人は婦人にも男子にも澤山ありますが、先づ、此の二人の婦人の意見が基礎となつて婦人問題は追々と盛になり、婦人運動は始まつたのであります。つまり、あらゆる點に於て、女子が男子に劣つてゐるのは、習慣が、或ひは教育が女子の發達を阻害してゐたからであつて、女子に男子と同等の機會と教育を與へるならば、女子も男子も同等の資格ある人間となり得ると云ふ主張でありました。

それから、女性に關する研究が追々盛んになりました。そして、婦人論者、及び婦人運動者に有利な議論が澤山現れましたが、其のうちで最も有利な議論は社會學者ウオードの女性中心説であります。

生殖は、男女兩性が結合して始めて行はれるやうに私共は考へて居るのでありますが、ウオ

ードの説によりますと、さうではないのであります。生物のごく／＼最初のもの、つまり原始的生物は、男性女性と云ふ區別はなく、單性と申しませうか又は無性と申しませうか、とにかく、男性と女性との交接と云ふことなしに子を生んで居るのであります。そして、一般に自己の身體から子を生むものを女性としてゐるのでありますから、ウオードは、其の原始的生物を女性としてゐるのであります。其處で、最初の生物間には女性のみ存在してゐて、男性と云ふものはない、つまり、生命は女性から始まつて居ると云ふのであります。

女性計りである最初の生物は、いつも母體と同じ子を生んでゐるので、其處に進歩と云ふものがなかつたが、進化の過程の或る時期に於て、男性と云ふものが現れて來て、女性のうちに其の血統を交叉して、其處に變化を起し、そして、生物の進歩發達の基礎が築かれたと云ふのであります。で、今日に於きましても、地球上のあらゆる生物に男性女性があるのではなく、男性のない生物の方が男性を持つてゐる生物よりもむしろ多いさうであります。ですから、女性は、全生物の本幹としてず、と續いてゐて、男性は單に、其の本幹に變化を與へるために後から女性にくつつけられたもの、いはゞ、自然の後からの思ひつきに過ぎないと云ふのです。

女性が生物の本幹で、男性は單に其の本幹の利益のために存在する證據としてウオードは、性の最も根本的なる女性の卵子と、男性の精子との大きさを比較し、卵子は精子よりも常に大きく、人間の場合には卵子の大きさが精子の凡そ三千倍あると云つてゐます。又無脊椎動物の大部分によく見る事實は、男性の授精の役が済むと同時に、女性は其の男性を捕へて食つてしまふことや、植物界に於ては、雄の方は單に雌の方に授精せしむるために存在してゐるのであるから、雄蕊は其の役目を終るや否やすぐ萎れてしまふに反して、雌蕊の方は授精後、益々精力が強くなつて、遂には實を結ぶに至ると云ふやうなことの實例を擧げてゐます。要するに、女性は無性の状態から、變化なしに進んで來た生物の本幹で、男性は唯單に其の本幹に變化を起し、發達せしむるための附加物であること、そして、鳥類や哺乳動物類の男性が女性より發達したやうに見ゆるのは、實は、男性の變異性を過度に發達させた異常の状態であつて、矢張り、女性が生物の系統の中心を代表し、女性は種族其のものであると云ふのであります。

此の女性中心説には折々反對説も出るやうであります。いつかも或る人がウオードの説は全然覆されたと申しますのでだん／＼調べて見ますと、前述の原始的生物をウオードが女性と呼ぶのに反して、其の反對論者は、其れを無性と云つたのに過ぎないのでした。又、或る論者は「女性を生物の中心とするに異論はないが、併し、其のために、自然界に於ては女性の方が男性よりも價值あるものだ」と云ふことは出来ない、なぜなら、下等の生物にあつては雌が雄よりも概して優れてゐるが、高等になればなる程、だん／＼雄の方が優れて來て、人間になつて、

男性の優秀が其の絶頂に達して居るから、つまり、女性は立派な男性を造る畠であり、材料であつたに過ぎない。」と云ふやうな説を立て、今日の状態である此の男性中心の思想、及び、状態を繼續しようとして居ります。

併し、ウオードの女性中心説が婦人論に根本的な、科學的な根據を與へたことは動かすことの出来ない事實であります。

現代社會の基礎となつてゐる男性中心説、及び、婦人論の基礎となつてゐる女性中心説に就ては、この位に止めて置いて、男性中心の思想の結果の家族制度に移らうと思ひます。

男性中心説を基礎とした家族制度は、決して、家族の者の利益、又は、幸福のために存在してゐるものではありません。其處で、ルソーに其の源をもつてゐる今日の個人主義的思想、又

は、婦人の覺醒に始まつた婦人論は、其の家族主義が根本的に間違つたものであると宣言してゐるのであります。

現代人の頭では、家と云ふものは、家族の幸福のために存在するものでありますから、昔のまゝの家族主義の家、つまり、家のための人と云ふ思想には耐へられなくなつて居ります。此の頃、しきりに、其の數を増して行く離婚、又は、家庭の破壊は此の新舊の思想の衝突による處が決して少なくないのであります。個人の幸福のために存在するものと思つてゐる家が、却つて、苦痛を與へるのであつたならば、其の家族關係を破壊しようとするのは、むしろ、當然でありませう。

又、嫡子相續の基礎を成して居る思想にも、今日に於ては疑ひが懐かれるやうになつて居ります。即ち、何故に、長男が次男の上に立つべきかと云ふ疑問であります。つまり、それは個人の不平等を増長するものだと見られるからであります。けれども、家族制度の見地からは、長子が相續人に選ばれるのは長子の個人としての権利の外に、一家の財産のいはゞ管理人と云ふ意味もあります。階級組織の社會にあつては、家は社會秩序の一定の位置を占めてゐる

ものでありますから、其の位置を維持するためには、家産を分配しないで一人の手に所有させて置く必要もあつたのです。

いづれにしろ、過去の階級組織と家族主義は、今、個人主義と婦人論の下に危機に陥つて居ります。やゝもすれば家庭が破壊されさうになつて居ります。で、私共は此の家庭が破壊される前に、家庭のうちに存在してゐる力、其の効用、其の使命を發見しなければなりません。そして、生命のない舊い家族主義の代りに、生氣のみなぎつた家庭主義を建設しなければならぬのであります。

舊い家族主義の許には、一家を支配してゐるものは先祖の位牌であります。これに反して、新しい家庭主義の許には、一家を支配してゐるものは子供の利益であります。私は、先祖の位牌はどうなつてもかまはないと思ふものではありません。一家を起した先祖の功勞には感謝も致しますし、十分な尊敬も拂ひます。けれども、現在とは全くかけ離れた時代に生きてゐた人の意志によつて、日に月に進歩して止まない時代に生きてゐる今日の人間が全然支配されると云ふことの不合理を認めないわけには行きません。

其處で、舊い家族主義から新しい家庭主義へ移り、先祖の位牌に支配されることの代りに、子供の利益と云ふことに、これを云ひ直しますと、次代の進歩向上と云ふことによつて一家を支配して行きたいと思ふのであります。さうすることのうちに、個人の幸福も社會の進歩も、みな、含まれて居るのであります。自分の子供を立派な人間にしたいと云ふ希望はどんな親でも持つて居ります。其の希望が満たされた程、親の身にとつて幸福なことではないでせうし、又親としての其の使命を自覺するならば、人は、自分の修養の必要も感じて來ますし、身を慎しまなければならぬことも悟つて來ます。

新しい意味の家庭は、社會組織の原則の種を蒔いて、社會組織の苗を造る苗床であります。此の苗床の苗の善し惡しによつて、社會の善し惡しも定まるのであります。

家庭は、又、子供に生活の手段を獲得させるためにのみ存在するのではなく、人格に行く大道に出る門戸であります。

家庭と社會との此の關係を、はつきりと了解するならば、結婚は社會組織を造り上げる機關であると云ふことが明らかになり、そして、何故に、一夫一婦が結婚の唯一の倫理的理想である

かと云ふことが分り、又、結婚を倫理的にするには何故、永久的でなければならぬかと云ふことも了解出來ます。

結婚生活の第一の使命は、まだ、發達してゐない子供に全くあらはれてゐない可能性を發見し、養育することでありませう。そして、其の仕事は眞の親子の愛がなければ出來ないので。集合保育、又は、集合教育を主張する人は、専門の保母や教師の方が、教育學を修めてゐない母よりも兒童を訓練するにより適して居り、より完全であると云ひます。けれども、保母及び教師の作用は家庭に於ける母の作用と相待つて始めて有効です。

親から子供を全然離してしまふことは教育上最も不合理な方法です。何故なら、原則として親程子を愛するものはありません。そして、親は僅かな數の子供のために全力を集中した愛を注ぎます。けれども、保母や教師はたとへ、どんなに親切な人であつても大勢の子供に其の親切を分配しなければなりません。子供の要求はいろいろありますけれども、其のうちでも最も重要なものは親の集中した愛であります。親の其の愛があつて子供の精神は始めて完全に發達することが出来るのです。まだ、羽の生へない小鳥に暖い巢が必要であると同じやうに、子供

つれづれ

には親の愛が必要です。

自分の有益さとか、又は、功績とかには無關係に、いつも自分を愛し、自分を尊敬し、自分を歓迎する處が無ければ、子供はまづすぐには育たれません。そして、それは自分を生んだ家庭、両親の愛によつて造られた家庭より外にないのです。此の廣い世界に於て、子供が安心して居られる處は其處より外にないのです。

次の時代、次の社會を構成する子供が精神的に肉體的に育てられるのは、両親の愛によつて造られた家庭より外にないのですから、其處で結婚は一夫一婦で、永久的のものでなければならぬと云ふ理由が明らかになります。

もう一ツ、どうしても見逃してはならない今日の悪い傾向は、親子關係がだん／＼ゆるくなつて行くこととあります。親に對する子供の尊敬心がだん／＼薄くなつて行くこととあります。そして、家族のものが有機體的にく／＼ついて居るのでなく、唯、單に同居のかたちになつて行くこととあります。

そして、其の原因は前にも述べた舊い家族主義にあるのです。家族主義においては家長であ

る父が家族のものゝ柔順を要求し、家族を自分に屈服させ、彼の口から出る言葉が直ちに法律であります。けれども、其の法律には度々專横な點があります。そして、個人主義的思想に傾いてゐる子はさう云ふ氣分には耐へられないのであります。そして、だん／＼親から離れ、親を尊敬しなくなるのであります。

處で、此の家長の絶対權に反抗して起つた個人主義的思想は、久しい間の因襲的な家庭の習慣や家長の跋扈から家族の者を解放するには充分でありますけれども、併し、自由に伴ふ重大な責任觀念を子供に注入しようとする空氣が家庭のうちに缺けてゐるために折角の解放も放縱を養成することになつてしまひます。つまり、子供を崇拜するあまり、子供に最大限度の自由を與へて置いて、そして、其の自由を活用する訓練を缺く結果は往々悲劇の發生となるのであります。濱田榮子が其の最も適切な實例であります。

それならば、子が親を尊敬すると云ふ健全な倫理的關係はどうして出来るかと云ふに、それは、親が子の特性を發達させてやらうとする役目に忠實であることによつて生れます。つまり子供は、後に社會に出て充分活躍出来るやうに其の特性を發達させて貰ふことによつて、親に

對して最高の尊敬を持つやうになります。つまり、両親は子供に肉體を與へたゞけでは親としての尊敬を受ける價值がない、併し、子供に精神上の誕生を與へることによつて尊敬される價值が出来るのであります。

子供の精神的の發達を計る親の義務は子供が丁年に達したからと云つて終るものではありません。両親は自分の生活から得た經驗と知識を自己の利益不利益を忘れて子供に授けるのみならず、成人した子供が人生に於ける困難に突き當つた時には、子供の最善な顧問であり、教師であり、有力な友であることによつて子供から尊敬を受けます。尊敬と云ふことの關係は相互的のものであります。即ち、子供の精神を尊敬することによつて、又、子供から尊敬されるのであります。

理想を持つてゐる人は其の理想の光りを他人に貸すことが出来るものでありますが、其の光りを最も多く貸すことが出来るものは自分の子供です。そして、其の光りを親から借りることが出来る子供は必ず其の親を尊敬します。ですから、要するに、親は自分に對する尊敬心を子供に持たせるのが親としての重要な一ツの義務であります。

尊敬心と云ふものは他人に對しても無くてならないものでありますが、此の、他人に對する尊敬心も、矢張り、家庭に於て養はれるものであります。つまり、兄弟姉妹其の外凡ての家族の人達を尊敬しなければならぬと云ふ習慣をつけられることによつて、子供は他人をも尊敬します。そして、四海同胞主義と云ふのは此處から始められなければなりません。

結婚の倫理的の理論に關して、もう一言云つて置きたいと思ひます。自然の秩序と道德的の秩序の間には大きな相違があることの一例としてキヤントは云ひました。

「賢い結婚が、まだ、到底、不可能な時期に於て、性の慾望は其の絶頂に達する」と。

其の外にも、此の自然の秩序と道德的の秩序のうちには明らかな根本的な不一致がありますたとへば、人の顔かたちと其の人の性質が一致してゐないやうな場合です。顔かたちはいはば先祖からの借り物であるかも知れないのに反して、其の性質は顔かたちとは、全く別な方面に造られもするし、又自分でも造ることが出来ます。ですから、顔かたちで其の性質を判斷して結婚してしまつて、自分の思つてゐる人の性質とはまるで反對な性質の人と結婚してしまつたと云ふこともありませう。

此の性質が合ふ、合はないと云ふことは今後は一層注意しなければならぬ問題です。今までは人はこれを無視してゐたわけではなかつたのですが、併し、それは唯漠然と取扱はれて居ました。けれども、今後はこれを立體的に、つまり、心理的に研究しなければならぬ、實驗科學の力を積極的に利用しなければならぬのです。

結婚關係は未來に於ては益々複雑になります。新しい教育の下に男女の個性が発達すればする程、夫婦の間の調和も困難になつて來ます。けれども、關係がどんなに複雑になつても調和がどんなに難しくなつても、もし、結婚當事者が結婚の理想的目的を忘れないで居るならば、其困難には容易に打ち勝つことが出來ます、そして、其の理想的目的とは結婚した男女は精神的生殖を行つて、次代を向上させる。其のために一生を費さうとする義務を悟ることでありま

す。其の義務を悟るならば、夫婦はお互ひのうちに潛む最善な性質をお互ひに誘ひ出すやうになります。そして、夫婦共同して子供のうちに潛んでゐる最善な性質を誘ひ出すことが出來ます。自分の子供は全體としての次代の代表者です、ですから、兩親が子供のために盡すこと

は、全體としての次代のために盡すことです。此の意味に於て、結婚は種族の繼續と云ふことの外に、精神的生殖を行ふことであつて、人類進歩の機關であります。

如何なる事業にも困難は必ず伴ふもので、そして、最大なる功績は最大なる困難に打ち勝たなければならぬものです、ですから、人類社會を改造すると云ふやうな大事業に大困難が伴ふのは餘りに當然であります。そして、人類社會を改造するに就ての最大困難は、法律の變化よりも、經濟狀態の改革よりも、實に、人間の本能の改造であります。

そして、此の仕事をするものは父母であります、併し、直接の責任者は母であります。なぜなら、本能の改造、即ち本能の教育は生れた瞬間から始められなければならず、生れた瞬間から、子供に接近してゐる者は母でありますから。子供に乳房を含ませながら、子供の精神的可能性を認め、善良なる本能を育くみ、不良な本能を押へると云ふ仕事は母でなければ出來ません。全く自分を忘れることの出来る母の愛が無ければ出來ない仕事です。

私の婦人論は此處に立脚したものであります。ですから、世間一般の婦人論が女權擴張、婦人の職業に對する機會均等、つまり、婦人自身の利益に終始してゐるに反して、私の婦人論は

家庭中心、母性保護であります。

今日迄の教育、及び、宗教の教へは、苗床で育つた稻を田へ移し植ゑてから、其の稻の性質を矯正しようとするのと同じでありましたが、私の婦人論は稻がまだ苗床にあるうちに、つまり、子供が教育家の手にかゝる前に、母が其の性質をほゞ造り上げてしまふものであるから、人間の苗床である家庭を美しく健全にして置かなければならない、母性を保護しなければならぬ、人類社會改革の源は此處にあると云ふのであります。

ですから、私の家庭中心説は、正當に解釋されさへすれば、社會主義者であれ、共産主義者であれ、帝國主義者であれ、其の他如何なる主義を持つてゐる人でも反對の理由を持たない筈です。

なぜなら、如何なる政體でも、如何なる制度でも其の成功不成功は人間性の如何にあるので、そして、私の家庭中心説はひたすら健全な人間性を養成するのが目的だからであります。

今日の人間にとつて、又、社會から見て、最も缺乏してゐるものは愛です、即ち、利他主義です。人間の本能はもとゞり利己主義に傾いて居るもので、其の利己主義は目前の自分の利益

のために止むを得ず一時は制限されて居ます。けれども、もとゞり自分にとつては無理な制限でありますから、自分に直接及ぼす利害が無くなつた場合には、すぐ、もとの利己主義に歸つてしまひます。

其處で、私共の住む世界に利他主義を豊富にしようと思ふならば、どうしても、人の本能を改造するために、本能其のものに利他主義の精神を植ゑつけなければなりません。そして其の仕事は前にも述べたやうに、母でなければ出来ないのであります。ですから、此の世の中で一番重大な仕事は母の仕事であるのです。

原始時代の人間は自分の本能と調和する仕事のみをして、それで通つて來たものです。けれども、世の中が進むに従つて人は自分の本能と調和しない仕事をもしなければならなくなりました。たとへば、一日に八時間とか十時間とか時間で縛られてはたらかされることは、殆ど誰にでも苦痛でありませう、即ち、それは、人の本能にさからつたことでありませうから。でも、人に責任觀念と云ふものがなかつたならば、到底、其の苦痛に打ち勝つて勞働の役目を果たすことが出来ないのでありませう。そしてその苦痛に打ち勝つ責任觀念の多少は本能の教育の多

少の結果であります。

そして、もう一度繰り返しますが、其の本能教育は母の仕事であつて、其の教育が行はれる場所は家庭であります。

婦人が此の責任を悟り、そして、實行する時に彼女は人として國民の母として全國民の尊敬を受ける價値を備へた立派な人格者になつたのであります。どんなに男性中心説を振り廻した人でも、男子其のものが女の手によつて造られねばならぬ以上、眞面目に考へたならば、女性を尊敬しなければならなくなるのであります。婦人は又、尊敬される價値ある女性とならなければならぬのであります。

第三章 家庭の危機に就て

舊道德の力、及び、宗教の力の失墜が今日の人心の動搖を來したと云ふことは夙に識者の認むる處であります。錨の用意もなく、梶も奪はれて碇泊所から突き出された船のやうな状態に

現代人は居るのであります。

一體、人には生殖の本能、親たるの本能、家庭を持ちたいと云ふ本能があつて、これ等の本能から來る動機が、あらゆる他の動機をひつくるめたものよりも強く人を活動させて居るものであります。

處が、今日の混沌たる状態に血迷つた人々は、人間の生命其のものと同じやうに大切なそれ等の本能を輕視し、枝葉な事柄として取扱はうとしてゐます。

併し、机上の議論は何であらうとも、事實は人間の親たるの本能、家庭的の本能が文明の發達の基礎となつて居ます。戦争が人道化されたり、貧民救濟の聲が高くなつたり、少年及び婦人勞働の保護法が出來たり、動物愛護の精神が生れたりしたのは、此の親たるの本能が基礎になつて居るのであります。家庭、母、子供を中心として生れた優しい情緒が社會正義の觀念の發達になつてゐると云ふことは本編第一章に於ても云つて置きました。

白痴狂癪か、さもなければ、人間の慾を所有しない聖人かでない限り、人は皆家庭の安定を冀つてゐます。親たる本能の満足を慾望してゐます。そして、家庭の安定、家庭の永久性が、

直ちに

、社會の安定、社會の永久性であります。

けれども、今日の婦人論者を始めとして、多くの社會改革家は此の重大なる家庭の問題に關れようとしません。家庭が、今、非常なる危機に面して居ることには大方の識者は無關心で居るのであります。

家庭を不安定にし、従つて社會を動搖させる要素は非常に複雑であつて、一ツの要素を捕へたゞけでは今日の此の状態を説明することは出来ませんが、其の重なるものを擧げて見るなら第一には機械産業の勃興、第二には個人主義の發達であります。

下層階級に於ける家庭破壊の原因は經濟にあります。婦人が工場に吸収されて行くために家庭は家庭のかたちをなさなくなつたのであります。

賃銀生活者に對する最も重大なることは其の位置の不安定と云ふことです。産業は労働者の利益よりも、亦、消費者の利益よりも資本に對する純益と云ふことが主になつて居ます。ですから、機械産業の發達の結果は失業問題がどんな僻村へも這入つて行きます。工場のごうぐと立てる唸り聲が周圍の小規模の仕事場を呑んでしまひました。そして此の状態が職工の勤勉

と眞面目の習慣を失はせ、社會的の無能者、無責任者を造り、家庭の廢類となり、結局は家庭の遺棄、貧窮、浮浪、罪惡の増加となるのです。

又、新しい産業組織は中流階級の婦人に影響を與へました。中流階級の婦人が經濟的の仕事に従事し、經濟的獨立をするやうになつたことが、家庭に少なからざる影響を與へました。これは個人の權利、個人の尊貴と云ふ觀念の發達となり、經濟上の依頼、家庭内の雜務に對する反逆によつて、一層問題を複雑にしました。

婦人に經濟上の獨立の機會と家庭の雜務から逃れ出る道を造つたことが母として、家庭の建設者としての無資格者を増加したのであります。

又、過ぐる何年かの間の富の増大は有産階級の妻達をより寄生虫的となし、誘惑の増加をきたし、利己主義的な無責任な個人主義の傾向を著しくし、家庭の意義の忘却となりました。それ等の結果が、又、性的道德の廢類となり、結婚關係の精神的意義を無視することによつて事態は益々混雜して來ました。

結婚關係に對する宗教的の意義が無視され、克己的道德が蹂躪され又、過去の家庭を保存す

るために大きな役目を果してゐた制度と云ふものが全く無視されるやうになつて以來、兩親並びに社會は次の時代に家庭の道德的、及び、社會的意義を教へることを全く等閑に附すやうになりました。社會的禍が殖えたことや、又は、家庭の安定が恐ろしくぐらつてゐることに就ては此處にも大きな原因があります。

産業組織の變化と同じやうに家庭に影響を與へたものは民主主義の精神であります。始めは政治の完成と云ふ方面にのみ動いてゐた民主主義の精神は、つひに社會全般に行きわたるやうになりました。前世紀の中葉に於て、奴隸制度が崩潰して以來、民主主義の社會化は一足とびに進められたのであります。財閥的の個人主義と民主主義との大きな争ひが此の民主主義を世界的にしました。其の争ひは、民主主義の精神を烈しくする計りでありました。そして最後に此の民主主義の精神が婦人に迄浸潤して行きました。何と云つても婦人は家庭に就ての保守的な習慣をもつて居たために、其の精神の影響を受けるのが最後であつたのです。

習慣を守ると云ふことは家庭の並びに國家の生命ではありません。併し限られた狭い範圍に蟄居してゐての家族の親密共働と云ふことは文明生活の發達に逆ふものであります。忠實の精神

自己犠牲、道德上の責任を守ることの誇りが家庭内にもみ限られてあることは今日の文明の理想に伴つたものではありません。

此の家庭的精神と、民主主義の精神とが今は或る範圍迄相反するものとなつて居ります。家庭は永い間、外部的な法律や、又は、獨斷的な宗教の批准を受けて來たのでありますが、民主主義の良心の勃興によつて、今は苦しんでゐます。家庭は進歩的な自己の良心による民主主義の精神が要求する役目を果さうとする時に、稍困難を感じるやうになつたのであります。

其處で新時代の要求は、家庭は最早、其の安定と永久性を外部の力によるのではなく、眞實な、聰明な、生きた自由意志によつて造らなければならなくなりました。

ダーウインの『種の起原』が出版されて以來、神學、及び倫理學に於ける權柄主義は其の石頭を打ちくだかれて、そして、民主主義の精神が非常に力強くなつたのであります。進化論は漸々と靜的な、外部的な、道德の制度化を無効にしました。人間はだんくと、結婚はたとへ神聖なものであつても、しかし、進歩的な共同生活に於て個性の發展に資するものが價値の終局の尺度であると感ずるやうになりました。

亞米利加に於ける離婚の数の増加に就て、ハワード教授は云つてゐます。『社會進化を眞面目に研究する人の目には、離婚の数の急速の増加は精神的解放の偉大なる過程に於ける出來事であつて、これが男と女の關係的位置を根本的に變化するものである。個人主義が社會化されたことによつて家長的家族制度は破壊されてしまつた。妻及び子供は、夫又は父の權力からだんたん解放されて行つて、そして直接に社會制裁を受けるやうになる。その結果、家族の一致共同の代りに新しい國家の一致共同が必要になる。家族的の結束はもはや強制することはできな
いが、併し、獎勵するだけである。家族をして一致共同させることはもはや法律によつては
なく、併し、精神によつてななければならない……家庭は根本的に精神的になつたのである。
實際、個人主義の社會化は結婚により、高尚な理想を齎らし、兩性關係により、正しい見解を與へ
た。』と。

結婚に對する權限が外部からのものでなく社會良心の發達によつて定まるやうになつたこと
は、結婚其のものにより重い責任を生ぜしめました。即ち、結婚關係の確實、又は永續と言ふ
ことは、最早、習慣、又は法律と云ふものによるのではなくなつたのです。そして、結婚關係

に道德上の又は精神上的の價值があるとすれば、即ち、結婚が、單なる形式、或ひは社會制度で
ないとすれば、其結婚の生命は意志と意志の同情的、及び聰明な共同によるわけになります。
それ故、家庭は今日に於ては、單なる惰性的な習慣によつては保たれなくなりました、新しい
家庭的精神が生れなければならぬ時に、今、私達は到達してゐるのであります。

一言で云へば、今迄、個人と個人を結びつけて、一ツの家庭を造らせてゐた紐は新時代の男
女を結び付けるにはもう役に立たなくなつたのであります。其の紐が古くなつたからと云つて
切りつばなしにして置いて差し支へないと云ふのが、今日の婦人論者、並びに社會改良家であ
りますが、併し、それは重大なる悲慘事であります。何は置いても、新しい紐を創造しなけれ
ばならないのであります。家族制度の崩潰を云々し、家庭生活を輕視しようとするのが、今日
の流行でありますけれども、子を見るのは親に勝るものはなく、老衰者の看護は子に勝るもの
がない以上、家族制度は大切であります。

第四章 婦人の心理的創造力の解放

婦人問題は孤立した問題ではなく、あらゆる問題に關係してゐるものであります。婦人問題はいはゆる婦人の問題ではなく人種の問題であります。常に性に關する問題ではなく、社會問題であります。猶又、婦人問題は物質の問題ではなく、精神の問題であります。即ち、人種の進歩のために婦人の心理的創造力を解放しようとするものであります。

婦人問題は婦人が男子に對抗し相争はうとするものではなく、男女の深い調和を計らうとするものであります。ですから、其の目的は家庭及び社會に混雜を引き起すのではなく、過去に於て婦人が爲し得たよりもより高い熱望をもつて婦人の使命を完成しようとするものであります。今迄よりも遙かに高尚な型の母性を發達させようとするのが其の目的です。

ですから、婦人問題の意味を誤解し、女性の性情、及び其の能力を無視し、母性の發達を阻止するものは婦人自身の向上並びに人種の進歩を阻害するものであります。

其處で、婦人の眞の自覺と云ふのは婦人の精神的の眼覺めであります。けれどもそれは所謂宗教的に眼覺めると云ふ意味ではありません。最高な生活の型を目標として、其の方向に萬難を排しても押し進んで行かうとする婦人の力を自覺することが精神的の眼覺めであります。勿論、其のうちには高尚な宗教的なたちが性格の一部とはなつて居ります。猶云ひ直せば、婦人の精神的の眼覺めとは婦人の創造的可能能力を充分に活動させようとすることであります。

過去の婦人は物質上の重い義務を負はされて居たために其れに妨げられて、此の精神的な創造的な領域に於て、女性としてこの能力を充分活動させることが出来ませんでした。併し、これは進歩の順序で止むを得なかつたのかも知れません。文明を押し進めて行くには、物質上の土臺が先づ造られねばならないのですから。

けれども、物質文明が此處迄に進歩して來た今日、いよく婦人は婦人獨特の領土、即ち精神的創造的の範圍に於て充分其の能力を發揮し、活動させる時に到着したのであります。婦人が其の使命に目覺めることが婦人の自覺であり、社會が其の使命を認めて、そして、獎勵することが婦人の眞の解放であります。そして、婦人の精神的の眼覺めが最も直接に人種に及ぼす

影響は子供が持つてゐる天才を発見することと、そして子供の其の天才が社會に及ぼす價値を見出すことであります。

何世紀も何世紀もの間、母の想像力が發達しないために、人種が失つて來た損害は實に計り知る事が出来ない程であります。鋭敏な母の想像力が子供の上に如何なる影響を與へるか、考へて見るならば、人種の進歩に母の力の與る處はどんなものであるかと直ぐに了解出来るでありません。遺傳の力も大きなものには相違ないのですが、併し、聰明な母が子供の心を理解して子供を養成する創造力は人種の進歩に無くてならないものであります。

誤解された婦人問題は、子供を誤解すると云ふ結果になりました。婦人があらぬ方向に發展して行かうとした結果は婦人の母性が萎靡し、婦人の子供に對する理解力が貧弱になり、そして、人類の發電機である子供の想像力は母の無理解のために押し潰されてしまひました。

唯、母の想像力のみが子供の想像力を認めることが出來ます。精神に同情することの出来るものは精神計りです。そして、其の精神は聰明な愛と共働することによつて子供の想像力を育てることが出來ます。

子供の想像力は、子供の一生の旅の旅行券のやうなものです。子供が如何なる方面に發達するかは、實に、此の旅行券によるわけです。又、子供の想像力は、まだ飛んだことのない鳥の翼のやうなものです。もし、母が裝飾としての外に、其の翼を認めることが出來ないなら、又母が其の翼の飛び得ると云ふ原理を知らないなら、子供の持つてゐる其の小さい翼は決して發達することが出來ません。ですから、母の精神的の理解力が、子供を大きな人物にでも小さな人物にでもする一大要素であります。母の無理解は餘りに度々子供の發達を阻害してゐるのであります。そして、それだけづゝ社會は損をしてゐるのです。

此處で、私達の考慮を要する點は、人類の利益のための、婦人の精神的及び知力的の解放としての婦人運動は科學的であるかどうかと云ふことであります。勿論、論理的に考へるならば、婦人問題は現代の有力な科學的思想に従つて考へなければならぬものであります。誰でもが知るやうに、今日の科學的の原則は進化的發達の原則であります。即ち、遺傳と環境の影響を受けなければならぬ人間は、絶えず、有機體の變化を受け、そして、環境に相調和しなければなりません。此の進化の原則に就ての知識が無かつたならば人間の努力の大部分は無駄

になります。

進化の原則は船に於ける磁石よりも人間にとつては大切なものです。或ひは又進化の原則はいはゞ人生に於ける海圖のやうなものであります。そして、此の進化の原則が私共に教へたものは、一切のものが決して固定してゐるものでない、即ち、かたまつてしまふものでない、一切が内外からの引力に影響されて常に動きつゝあるものだと言ふことであります。

ダーウインは種の無限に變化することを示して、此の進化の法則を私共に教へました。スペンサーは政治に教育に結婚に宗教に此の進化の法則を應用して、そして、一切の社會制度は決して確定したものでなく、常に流動しつゝあることを教へました。マルクスは、又、此の進化の理論を産業に應用して、そして、今日の偉大な産業の活動を豫言しました、英國の文明史を書いたバックルは英國の文明の説明に此の進化論を應用してゐます。

かくの如くに、進化の原則は殆んどあらゆる社會現象を、説明し得ることが立證されてゐます。そして、私共は此の進化の法則がある方面に於て働いてゐることを承認してゐます。それならば、人類の母である婦人のみが、此の進化の法則の外に居ると言ふわけはありません。

ん。一切のものが、此の自然の進化の法則に支配されてゐるのに女性のみが依然と昔のまゝの型で居られると云ふ理由がありません。今迄は、常に自分の利益を無視してゐた女の愛情は永久不變なものだとされてゐました。けれども今や其の矛盾が取り去られねばならぬ時に私共は到着しました。

科學は男のための科學であつて、女のためのものでないと云ふ理由はありません。進化が男にのみ行はれて女には行はれないと云ふ理由は無いのです。男はいろいろのことを經驗するの進歩して來ました。男は自分の力を常に新しい方面に用ひたことによつて新しい能力を造り新しい作用を起して進歩して來ました。けれども婦人の力は狭い範圍に限られてゐました。従つて、今迄の婦人の經驗は淺い、變化が少なかつた、其のために婦人は男子に後るゝことが遙かであります。

けれども、今や、婦人は眼覺めつゝあります。此の時に當つて科學の力が此の眼覺めを促進しなければなりません。人種の進歩が其れを絶対に要求します。

婦人と云ふ船は、今、未來の國民と云ふ神聖な荷物を積んで創造的進化の一般の方向に向は

ねばならぬ時に到着しました。かう考へる時は婦人の經濟的の獨立などと云ふことは些々たるものになつてしまひます。

男と女の日々の仕事は異つても——又、異ならなければなりません——併し男と女は同じ海の上を同じ目的、即ち、精神的に完成された國民の養成と云ふ港を指して航海するものであります。

して見ると、婦人運動は人間の發達の法則と相並行するものです。そして、正確に科學的であります。人間の進化の理法に照して見ると、婦人運動は生理的から心理的に、心理的から精神的に進んで來たもので、人類と云ふ大家族の發達の結果、今日に到達したものであります。ですから、婦人運動は宇宙の歴史に於て、最も有意義な、遙かに影響する運動であります。

婦人に關して最も古い信仰をもつてゐる人でも、人間の精神上の發達を不可能なことだとは思つてゐないでせう。人生は物質のみをもつて満足できるものではありません。今日の私共は精神界の海上を航海するために生れてゐるやうなものであります。そして、かう考へて、婦人問題を精神的に解釋するならば其の時に始めて誤解された婦人問題が正當に解釋されます。そ

して婦人問題は建設的であつて、決して破壊的でないことが明かになります。

婦人問題はあらゆる社會問題の最高に位するものであります。

第二編 戀愛と結婚

女は夫に素顔を見せるものでないと祖母や母が云ふのを聞いて、私は夫婦の間がそんな窮屈なものであるならば、結婚は實につまらないものだと思つたことがあります。それから二十何年後の今日でも矢張り私は其の時と同じ考へを持つてゐます。

男女の愛は朝日に光る草の上の露より美しく、春の朝高らかに歌ふ小鳥の聲よりも清らかである筈です。そして、夫婦は戀人のやうに愛し合ひ、親子のやうに懐しみ合ひ、兄弟姉妹のやうに親しみ合ひ、朋友のやうに信じ合ふものでなければならぬ、と私は思つてゐます。草の上の露の色、春の朝の小鳥の聲に厭きることとはなくても、相手の男又は女に厭きが来ると云ふのは、本當の愛の美しさ、其の愛の使命を知らない男女が顔や心にお化粧をしすぎる、つまり醜い處をかくさうとして、却つて眞純なものをも覆うてしまつて、生氣のないデクノボウになつてゐるからであらうと思ひます。

第五章 新時代の戀愛と結婚

何もかもが進歩しつゝあることはいつの時代に於ても同じであります。過渡期にある現代に於ては、殊に、急激に、何もかも改造されようとして、一切の習慣、及び制度が疑ひの目をもつて見られ、解剖され、そして、變化を受けようとしてゐます。けれども、何もかもが改造され、變化を受けても、決して、變化を受けないものは戀愛と結婚であります。

戀愛、及び、結婚に對する人々の態度には變化がありました。又、なければなりません。のみならず、此の上にも、まだく断然たる變化が無ければなりません。けれども、其れは、唯戀愛、及び、結婚に對する態度であつて、決して戀愛と云ふことと結婚と云ふこと、其れ自身に變化があるわけではありません。

昔は落雷を避けるために線香を立てたり、呪文を唱へたりしました。つまり、怒つてゐる鬼神に其の怒りを鎮めて貰はうとして哀願したのです。けれども、此の頃では避雷針を造つて落

雷を避けるのみならず、其の雷をひッ捕へて来て燈火にしたり、暖爐にしたり、車を引かせたりします。けれども、雷其れ自身の性質は昔も今も少しの變りもない、唯雷に對する人間の態度が變つたのです。

戀愛に就いてもです。今迄は戀は思案の外であるとか、戀は曲者であるとか、女は謎であるとか云つて、戀愛を一種異様な魔物であるやうに考へて來ましたが、併し、今では此の戀と云ふことに就いて人は批評的の目を持ち、これを解剖しようとしてゐます。

人間は自然を征服することに或る程度迄成功しました。前に云つたやうに空中に荒れ廻つてゐる電力を捕へて自己の用に供し、水力に轡をはめて私共に必要なものを生産させ、星の性質を調べたり、太陽の運動を測定したり、實に、自然界に支配される代りに、自然界を手掌てのひらに載せて、其の性質を解剖し、支配しようとしています。實に、知力の力は素晴らしいものであります。

處で、偉大な効果を擧げることが出来る知力を得た人間の心は、直きに驕つて、何もかもが知力で處理出来るやうに早呑込みをしてしまひました。そして今日迄の婦人問題も矢張り其の

弊に陥つてゐたのであります。

つまり、知力に餘り重きを置くの結果、戀愛を輕視しようとする傾向を持つやうになりました。戀愛は人生に於ける一挿話、結婚は私共の生活の、唯、一部分であるやうに考へようとなりました。

けれども、戀愛と云ふものをどう云ふ風に見た處が、つまり、人生に於ける一挿話として見た處が、又は、以前のやうに其れが一種の魔物であるやうに見た處が、矢張り、昔も今も同じやうに其れは其の優絶な力を人間の上に揮つて、男の、又は女の全生活を根本からゆすぶり動かします。其處で私共は、何故に戀愛は私共人間の上にかくの如き優絶な力を持つてゐるかと思ふことを考へなければならぬ。即ち、其れは私共の性質に根本的に植ゑつけられてある自然の意志であると云ふ處を考へたいと思ひます。かくして自然は種族の繼續、其の向上を計畫したのだと云ふことを考へたいと思ひます。

戀愛と結婚は種族的な大使命を持つたものであり、結婚制度と云ふことは凡ての制度のうちで最も古く、殆ど、人間がまだ動物のやうな状態に居るうちから存在してゐたと云ふことを認

めたいと思ひます。子供を育てるには両親の共力が必要である處から結婚制度は生れたものがあります。種を保存するために自然は人間に計りでなく、高等動物から鳥類に至る迄、家庭生活と云ふかたを定めて置きました。そして、種族の進歩、即ち、子供の利益と云ふ立場から、子供のためには一人の生みの母と一人の生みの父の保護が必要である以上、一夫一婦制が最善な、そして、最上の制度でなければなりません。

知識にかぶれた新しいことを好む人達が、たとへ、どんなことを云はうとも、先づ、釋迦、基督、日蓮と云ふやうな非凡な人物は別として、普通の人間には異性との接觸が必要であり、そして、其の上に男は妻を全部自分のものにしようとし、女は夫を全部自分のものにしようとする希望を熱烈に持つて居ます。そして結婚制度、及び、家庭制度は皆此の人間生來の重大なる必要の反映であります。

異性との接觸を慾望し、しかも、一人が他の一人全部を慾望する、つまり兩性の融合を慾望する結果は、其處に、必ず、家庭と云ふ感情が伴つてゐます。そして其の家庭と云ふのは單なる木造の、又は石造の家ではありません。家庭とは人格の反映であります。しかも、婦人の人

格の反映でなければならぬのであります。

けれども、今日迄の家庭には傲慢な男子の勢力が充満してゐて、家庭内の空氣は主婦の人格の反映ではなく、男子の家男子の家庭であつて、婦人は唯其の男子の家の内の一個の道具に過ぎなかつたのです。知力的な婦人が家庭生活を呪ひ結婚を避けようとするのも、彼女等が知力に囚はれたとは云へ、此處にも一重大原因があるのです。兩者の融合でなく、所有される、從屬せしめられると云ふ事實が除去されないうちは新婦人はいつ迄も家庭生活を呪ひ、結婚を避ける傾向を止めないでせう。そして、其の結果、不幸な圓滿を缺いた男や女の數が多く、其の上に入種の損失は莫大であります。

夫にも妻にも同等に精神上の自由があり、同等に法律上の權利がある時に、あらゆる婦人が始めて喜んで家庭に入ることに甘んじ、圓滿に天性を發揮し、そして家庭をして自分の人格の反映たらしむることが出來ます。今迄は、結婚は婦人のためには自分の人格を無にすることであり、外との關係を全く絶つことでありました。けれども、新時代が要求する結婚は男女の生活を豊富にすることである、男女、力を合せて、幸福に、社會のため入種のために奉任するこ

とであります。

ですから、眞の意味の婦人運動の目的は野生の戀愛を解放することでも、單に經濟上の力を得ることでもありません。自覺ある婦人は戀愛の自由を要求します。強制結婚には戰慄します。けれども、それは情實や經濟上の理由から成立する結婚を抗み、眞純な愛情の結果の結婚を希望するのです。

けれども、今日迄の婦人運動の誤りは個人としての婦人の権利の伸長、婦人の經濟上の獨立を目的とし、其の上に戀愛を個人の事として居た、めに、婦人のためにも、男子のためにも、又、社會のためにも不幸を招きました。個人の幸福、個人の権利の伸長としてのみ見る戀愛は非社會的であります。一體、文明の進歩とは社會全體の幸福を意味するものです。處が、今日迄の婦人論は個人としての婦人の自由を叫ぶあまり、社會と最も交渉の深い、否、未來の社會其れ自身である子供を邪魔物扱いにして來ました。けれども、其の大なる誤りであると云ふことは確實に徐々と世界が認めて來ました。

婦人の位置と云ふことに全注意を傾けてゐた世界は今や子供と云ふことに其の視力を集中し

て來ました。國の力、社會の改良、人類の幸福と云ふことは未來の國民、未來の社會を形成する子供の質によると云ふことに氣付いて來たのであります。其處で、人類の進歩、延いては婦人の、又は男子の幸福は、決して結婚を破壊するのではなく、結婚を改良することによつて得られると云ふことを認めて來たのです。

其處で、物質の上に成立する結婚でなく、肉慾に立出た結婚でなく、精神の上に結婚は成立しなければならぬと云ふことになつたのであります。そして、これは優生學からも、生物學からも、社會學からも批准されて居るのであります。

『自由選擇による結婚を爲し得る婦人が新時代の改造者である。』と或る學者は云つてゐます。人知の力は前に述べたやうに素晴らしいものであります。併し、人間の活動が知力で終つてしまつたならば、人間の力は直きに制限されてしまひます。人間にはもう一ツ征服しなければならぬ領土がありますが、其れが人間の精神であります。人間の精神は自分の利益と云ふことに興味を限つてしまはれない程大きいものであります。生存競争と云ふことは見逃さうとしても見逃がせない大きな事實であります。併し、人間には元來もう一ツの人間の要素があり

ます。即ち他人のために計らうとする衝動であります。野蠻人ですら負傷した他人を見殺しに
はしませんでした。木の枝の上にしつらへた自分の住所に、又は、穴の中の住所に負傷者を連
れて行つて介抱してやりました。又、今日に於ては老衰者や虚弱者や、つまり生存競争に耐へ
られない者を不完全ながらも收養する方法を立て、居ます。かう云ふやうに利他主義、愛と云
ふ精神的な方面を豊富にすればする程人間は強くなります。

それだけではありません。人間は自分のうちに持つてゐる精神の力によつて外界と自分との
関係のみならず、自分の内部の力の源と自分との関係を發見しました。つまり、自分自身を發
見したのです。人間は單に食欲愛慾を持つた肉體計りではないし、物質を征服することが出來
る知力のみでもありません。つまり、人間は肉體と知力の外に創造的精神を持つてゐるのです。
そして、これは無限なものであるのです。人間は藝術、宗教、科學を發達させるのみならず、
猶又、自分自身が最善最高な境に達する可能性を持つてゐます。つまり、自分のたましひのう
ちに起る精神的の嵐を支配する力を持つてゐるのです。人間は自己を制裁する威嚴、即ち、自
分を最善最高に導いて行く道を學びました。人間は自分が創造された計りでなく、自分自身が

創造者であります。人間は進化のおもちやではなく、進化の主人であります。人間は自由な精
神の可能性を通して自分自身の運命の創造者であるのです。何物にも屈しない精神の力をもつ
て、あらゆる議論を押し退けて、創造の絶頂に立たうとする意志を人間は持つてゐます。

此の意志、此の精神の力を婦人が認むることが婦人の自覺であります。精神的な生活と云ふの
は、唯、單に宗教的になることではありません。つまり、神佛を拜んだり、教會に行つたりす
ること計りではありません。歛持つ人、算盤持つ人、劍を持つ人の毎日の生活が精神的でな
ければならないのです。殊に、次代養成の任にある婦人が精神的でなければなりません。精
神の力はものを創造する計りでなく、ものを復活させます。精神の表現はいつも同じではあり
ませんが、精神の力それ自身はいつも同じで、そして、人間の内部に燃えて居るものです。
自覺したと云ふことは内部に燃ゆる其の力を認め、そして、どう云ふ風に其の力を用ゆべき
かを知ることです。ですから、自己確立と云ふことは精神的になり、創造的になり、そ
して、進化の最高な目的に共同して働くことでもあります。

婦人の権利伸長、婦人の經濟上の力の獲得は婦人の内部に如上のやうな精神及び意志があつ

て、それを保護するために必要だとする時には無上命令的に必要であります。けれども、さう云ふ精神が燃ゆるのでもなく、さう云ふ確固とした意志があるのでもなく、徒らに、外面的に權利伸長、經濟力の獲得に絶叫することは、何とも騒々しく、まるで破れ鐘を叩かれるやうな氣持ちがして、私としては我慢出來ないのであります。

今や、一切が改造されようとしてゐる過渡期に立つた私共は、殊に婦人は、折々本當らしく光る狐火のやうな議論に迷はされることなく、太陽は太古の昔も今日も同じやうな光りを地上に投げて居ると同じやうに、戀愛と結婚は私共の生活に最重要なる意義があり、幸福の源であることを認めて、進化の軌道の上をまつすぐに進んで行きたいと思ひます。

第六章 結婚に對する現代人の態度

一

何事に限らず始めるには容易であります。併し、それを持續しようとする時に其處に大抵

困難が伴ひます。今日の若い人で外國語に手をつけてゐない人は先づ無いでせう。けれども、さて、どれだけの人が其の外國語を活用してゐるか云ふと、それは本當に僅かなものであらうと思ひます。私どもが米國から歸る時には、歸朝する同胞が三百人程同船しました。けれども、其のうちで英書を手にしてゐる人は殆ど一人もありませんでした。皆日本から送られた『太陽』『實業の日本』『婦人世界』と云ふやうな雑誌や、講談ものや、蘆花さんの小説と云ふやうなもの計りを讀んで居ました。で、其の理由を観察して見ると、實は誰も彼もが英書を樂しむ程又は、活用する程英語が出來てゐないのでした。

英語國に住んでゐて英語の必要は毎日々々彼等をヒシ／＼とせめつけてゐるに相違ないので、そして、少なくとも五六年、多くは十有餘年、さうした生活をして來た人達なのですが、それでゐてさうなのですから、日本に居る一般の人達が外國語の書物を利用出來ないのは、むしろ、當然であるかも知れません。『外國語をやつて見よう』『外國語を一つ利用してやらう』かう思ふのは百人が百人皆同じです。そして、語學研究はさうさなく始まりません。けれども、さうさなく始めた其の研究を倦まずたゆまず續けることは、さうだん事ではありません。そして

百人のうちの九十九人迄は其の困難に負けてしまふのです。

戀愛が又さうです。一人の男と一人の女の間には戀愛が成立するのは比較的容易です。けれども、一生涯を貫いて其の戀愛を生かして行かうとする時に、それも又じょうだん事ではありません。其處に必ずいろ／＼な困難が出て來ます。けれども、一生涯の大方針を定めると同時に、毎日々々の小さなことにもお互ひにゆづり合ひ、お互ひに責任を重んじ、結婚生活を全うして共白髪の末迄も添ひ遂げて、始めて偉大な戀愛、有益な結婚であつたのです。

けれども、今日迄の戀愛物語は、大抵、結婚が其の終結でありました。物語と云ふものが、唯、一時のなぐさみに過ぎないものであるならば、其れでも一つの役目を果してゐるのでせうが、しかし、迷ひ易い一般人に生活の標準を教へようとする時には、物語は結婚から始まるべきものだと思ひます。見染めるとか、求愛とか、新婚旅行とか云ふやうなことは戀愛のほんの序幕で、本當の芝居はそれから後に始まるのです。序幕に計り重きを置いて本當に力を入れなければならぬ結婚生活其のものを輕視してゐる結果が數限りのない結婚哀話となり、結婚の悲劇となるのです。

或る女流小説家の感想文のうちに次のやうな處がありました。夏の一夜彼女はもう眠りに付いた幼児を下女に任せて。夫と二人で散歩に出かけたのです。二人は銀座邊迄出かけて行つてそして、カフェーへよつたり、まぶしいやうな美しい陳列窓をのぞいたり、橋のたもとやうす暗い處へ來ると夫がふざけて、ちよいと物かけに姿をかくしたりするのを彼女が見つけ出して夫の背中を叩いたり、まるで結婚前の戀仲であつた時のやうに楽しい、いゝ氣持ちになつたのださうです。そして、其のいゝ氣持ちは電車に乗つた後迄も、又、電車から下りて淋しい郊外の暗い道を歩む時迄も續いて、二人は手を引き合つてゐたのださうです。處が、うちの前迄來ると家の中では子供が目を見ましたと見えてワー／＼泣いてゐたさうです。で、其の聲を聞くと同時に、彼女は今迄の楽しい氣分がすっかり消えてしまつて『ああ、自分達の楽しい時代はもう過ぎ去つたのだ。自分達の甘い戀はもう過去のものだ。自分達の今の生活はみじめだ。これが現實なのだ。』とつく／＼思つたと云ふのです。

私はそれを讀んだ時にブツとふき出したいやな気持ちになりました。同時に幾分の憤りを感じました。もし、それが男子の感想文であるならば、『男の無責任な享樂主義が又始まつた』位に感じて、自分の心を通過させてしまふことが出来たでせうが、それが婦人であるだけに私の心にひつかゝつて、幾分の憤りさへ感じたのでありました。徹頭徹尾利己的な俗悪なかう云ふ種類の個人主義的の戀愛觀が現代人の最大なる缺點である事を私は信じてゐるものでありますから。其のために男も女も不幸である計りでなく、子供の迷惑は甚大なものでありますから。

三

今より五六年も前のことですが、地方から出て來た或る若い婦人が私方に三四ヶ月滞在してゐたことがありました。彼女は可なり高い位置を占めてゐる役人の妻であつたのですが、或る青年にラヴを感じたために其の役人の妻となつてゐることが苦痛で堪へられなくなつて、一切を捨て、上京したと云ふのでした。彼女の話によると、彼女はまだ何にも知らぬ十六七の時に彼女の親が何かの策略上彼女に強ひた結婚であるために、従つて夫に對して愛情を感じたこと

はなかつた。だから、今度のラヴは正當だといふのでありました。話を聞いたゞけでは本當に同情に値ひするものでありません。そして、無意義な結婚生活、寄生の生活には堪へられなくなつて上 したのであるから、女中代りに使つて呉れ、精神上の苦痛に比べては臺所の仕事や、すゝぎ洗濯位何でもない。神聖な愛のためにどんなことでも忍ぶ覺悟だ、と云ふのであります。

一應尤もな言葉に私達も同意して、臺所を働いて貰ふことにしました。處が、彼女が思ひをよせてゐる青年からは決して使ひがありませんでした。毎日のやうに彼女が手紙を飛ばせるのでしたが、決して返事が來ませんでした。幾人かの女中を使つて何一つ不自由のない奥様の身で居られるものを、其の男のために下女のやうなまね迄してゐるのだと云ふやうなこと迄も書き送つたやうでしたが、それでも其の男は一言のなぐさめの言葉さへ彼女に書き送りませんでした。つひに彼女は全く絶望のどん底へ落ちてしまつて、何も手につかないやうになりました。目はずり上がつてしまつて、さがないことを口ばしるやうに迄なつてしまひました。それには私共も全く當惑してしまつたのです。

或る日彼女はかうして一所にゐてもお互ひに窮屈だから、自分は弟でも呼びよせて、小さな家を持つて見ると云ひ出しました。そして、彼女は私の家を出て行きました。それは或る年の三月でありました。處が、彼女は私方を出るなり、何日たつても何の便りも呉れません。『家を持つとは云つたが、家を持つた様子もなし、どうしたのだらう。あんな變な目付きをしてゐたから自殺しはしないだらうか』と云ふやうなことを云つて、明け暮れ私共は氣遣つてゐました。それから、何ヶ月か過ぎた或る朝一本の手紙が参りました。見ると其の婦人と名は同じでしたが、姓が異つてゐました。『はてな』と思ひながら開いて見ると、それは矢張り彼女からで、しかも私方を出た翌々月の五月、目もつり上がる程戀してゐた青年ではなく、外の男と結婚した知らせなのでした。あまりの意外さに私共は唯呆氣にとられる計りでした。

後から聞く處によると、彼女は私の家を出るなり、直ぐ或る文士の許を尋ねました。と云ふのは、其の文士が彼女の戀する青年と知り合ひであるので、其の文士の手を経て其の青年から手紙を取らうとしたのでした。けれども、其の文士と夫婦になつてしまつたのです。それから二年たち、四年すぎても其の夫婦は無事にむつまじく——尤も會つたことがないのですから、

實際はどうであつたか分りませんが——暮して居るやうでありますから、實に不思議なものだと私は常に思つてゐました。死ぬ程戀しい男が外にあつて、そして、其の文士もそれをよく知つてゐて、どうして夫婦になつて居られるものかと云ふのが私の疑問であつたのです。

處が、此の頃新聞紙は其の夫婦が離縁になつたことを報じてゐます。『成程ね』と私は始めて合點が行つたのです。便宜上一時一所にゐたのだと云ふ事が分つたのです。二人の間に戀愛が成立したのでもなければ、又、本當の意味の夫婦でもなかつたのです。自分自身に忠實でないものが夫に對し、又は、妻に對して忠實であるわけがありません。忠實がないのに立派な夫婦の實が擧がつて行くわけがありません。

四

生涯を貫いて健全に成長して行く立派な夫婦の愛は、清い美しい戀愛が中途で同情に脱け變つたものであります。清い美しい戀愛の持主は既に清淨な着實な心の持主でありますから、日の生活の極く小さな事柄にも責任の觀念がつよいに相違ありません。そして、眞面目に苦勞

を共にし、苦痛を分擔してゐるうちにいつの間にか戀愛は同情と化し、夫婦の間はますますくたくたく結ばれて行くのです。前述の女流小説家のやうに、又、大多數の男のやうに、いつも花にたわむれる蝶のやうな戀を求めてゐる人は、一生迷つて戀を漁り歩く浮氣ものです。ジャラツキたいために相手を求めるのであるから、妻の容色が衰へるならば外に若い女を求め、夫が生活につかれて、じとむさくなれば、外に若い男を求めるやうになるのです。

又、一時の孤獨を忘れるため、或ひは食べさせて貰ふために夫婦になつて性格の適合も、理想の合致も、獻身の精神も、義務の觀念も、調和の見込みもないのに同棲するのであるならば結果が不幸に終るのはあまりに當然です。結婚は自己の完成であると同時に、種族への奉仕、社會への義務であると云ふことを忘れて、唯、自己満足の具としようとする時に、其處にさまざまの不便不幸が生じて、遂には悲劇に終るのです。

語學をものにするには、少なくとも、一日のゆるみもない十年の月日が必要でありますやうに、一組の夫婦が立派に成立するには、つまり、戀愛が同情に脱け變るには、矢張り其の位の年月の絶えざる自己犠牲の精神、並びに社會奉仕の觀念が必要です。そして、其れには確固と

した理想と、勤勉な修養が必要です。

宗教的な嚴肅な意義を結婚生活のうちに認めることによつて、其の中から私共の結婚生活の幸福は生れて來ます。けれども、義務や奉仕の精神を切り離した結婚生活を求めることによつて、さう云ふものは此の世の中に存在しないのですから、いろいろの間違ひ、悲惨な結果が生じ、社會の風儀が亂れるのです。

五

現代の新人と云はれる人の結婚觀は個人の權利、そして、自己の利益が中心であります。けれども、從來の結婚は種族への奉仕、社會への義務でありました。我が國の從來の此の結婚觀は猶太人の結婚觀によく似てゐます。猶太人の道徳は個人的でなく集合的でありますから、猶太人の結婚は個人の完成でも、個人の満足のためでも、快樂のためでもなく、神への奉仕、神の子なる種族の繼續が目的であります。子供を生み養育すると云ふことが人生に於ける最大事であり、子供のための結婚と家庭生活が凡ての男女の義務であつて、そして、それが根深

く宗教的になつて居ります。ですから、猶太人の母は家庭外の仕事、即ち、家を外にしての仕事にたづさはることを嫌みます。彼女達は非常に舊式であります、併し、彼女達は無限に幸福であります。

猶太婦人の理想は決して自個の表現ではなく、夫に、子供に、種族に、神に同化することにあります。彼女たちは自己の生活を習慣に従へることを無上の価値と心得てゐます。内部生活の価値を十分に自覺してゐる婦人が矢張りさうです。基督教の結婚観は人間の弱點がしからしむるので止むを得ないことだとしてゐるに反して、猶太教の結婚は神の命令であります。基督教とは正反對に結婚しないことが神に對して罪であります。猶太人にとつては禁慾主義が罪であると同時に、戀愛が人生の全部であるかのやうに觀するローマンチックな見方も等しく罪惡であるのです。

猶太婦人は徹頭徹尾個人主義でありません。そして、一切が其處から出發してゐます。結婚のうちに決して自己満足を求めようとはせず、自分自身の喜びのために心を全部ひかれると云ふこともなく、自分自身の悲しみのために自分を没すと云ふやうなこともなく、彼女達は絶對

に夫を信じ子を信じてゐます。そして、夫や子供が彼女達を失望させた時には、彼女たちは彼女たちの種族を信じ、神を信じてゐます。これが猶太婦人の生活の重心となつてゐるのです。數千年の間猶太婦人は奉仕の価値を教へられ、理想への獻身的精神を養はれて來ました。そして、神の意思に従つて結婚したと云ふ觀念が彼女達の結婚を確實にしてゐます。そして、其處から完全な幸福を得てゐます。

たとへ無學であつても、彼女達は一つの眞理を握つてゐます。つまり、我々は自己を無にするることによつて幸福であり、我々の生命が不朽であると云ふ眞理を彼女達は握つてゐるのです。書物から學ぶのでなく實際生活の上から彼女達はそれを悟つてゐるのです。猶太人の精神は、夫に子供に及び家庭に獻身的であることを婦人に要求し、又、男子には理想に及び妻に獻身的であることを要求してゐます。そして、男女各々が獻身的である事によつて、男女は平等な榮光、平等な喜び、平等な名譽を贏ち得ることを信じてゐるのです。家庭の神聖と云ふことが何代もくの間猶太種族をつないで來た美しい金鏈であるのです。家庭の神聖を汚すものに對しては猶太人は常に勇敢に戦つて來ました。

ですから、猶太人の家庭は常に平和で、そして、美しいのです。婦人のなさねばならぬ仕事は習慣によつて規定され、神の命令と云ふことによつて、神聖にされてゐますから、一家の主人は毎週金曜日の晩に自分の妻である主婦の徳を賞揚するために、舊約書のうちの箴言の一節をとつて、家族を皆集めて讀上げます。そして、それは『徳の高い婦人は家事を専心注意する彼女の用ゆる衣類は丈夫である。彼女のよそほひは凛々しくある。彼女は常に未來に希望をもつてゐる』と云ふのであります。其外猶太人の夫が妻に拂はなければならぬ義務はいろいろあつて、それは細々と規定されてあります。其の規定に従つて彼は彼女のために働き、彼女を崇め、彼女を扶助するために彼女に結びつけられてゐるのです。猶太人の生活の基調となつてゐる書物の中に次のやうな事があります。

『富者とは誰か？』

『動作の優美な婦人を妻とした人である。』

『幸福な人とは誰か？』

『温和な謙讓な妻を持つた人である。』

そして、又、

『男子の幸福は徹頭徹尾妻によつて創造されるものである。』

と云ひ、又、

『純潔な愛情のみなきつてゐる家庭に神が住む。』

と云ひ、それから、又

『汝の妻に冷酷で無禮であつてはならぬ。己れの行動が妻を苦しめることになりはせずやと夫は常に注意してゐなければならぬ。なぜならば、妻に涙が多い時には、妻の上に置かれた其の苦しみは神の近くに行くものであるから。』

と男子に命じ、男子を戒めてあります。そして、これに類した句は猶太人の書物のうちには數限りもなくあると云ふことです。かう云ふ風に猶太婦人が夫に崇められるには彼女が既にそれだけのことを實行してゐるからです。猶太人の父は彼の家族の宗教上の教師でありますから

其の義務が必然彼を家庭的にします。妻への献身が男子の本務であると云ふのが國民性になつてゐるので、猶太の法律が制定される時に或る人が

『もし、夫が妻に對して不親切であつた場合には』

と質問した時に、立法者は

『夫が妻に不親切であると云ふやうなことは此のイスラエルのうちにはあり得べきことではない。』

と答へたさうであります。かう云ふ態度の民族が母性を尊重することは云はずもがなであります。

『凡ての道德の教師』

と云つて、彼等は母性を崇めてゐます。

固定した信仰、何千年の間使ひ古した習慣の下に行はれる結婚、及び、家庭生活が幸福であるのに、進んだ知力の所有者、自覺したと云はれる現代人の結婚及び家庭生活に不幸が多いのは何故でせう。進んだ知力を所有する我々現代婦人が全然舊婦人のやうな、又は、猶太婦人の

やうな態度になつて自己を没却することは不可能でありませう。けれども、少なくとも舊婦人の持つてゐるものから我々は學ばねばならぬ處がありませう。

現代婦人のなやみの多くは思想の混亂から來てゐます。舊婦人の思想、舊婦人の生活の標準を捨てたが、さて、それに代る一定の理想と、夫として妻としてとるべき行動の標準もないのが、凡ての混雜、凡ての不幸の源であらうと思ひます。現代婦人の誤まつた平等觀があらゆる禍を生んでゐるのであらうと私は思ひます。現代婦人の生活の標準はいろ／＼あります。結婚後も職業に従事しようと思へば出來ます。それに就いて非難する人はありません。又、夫の收入を當てに家事を専心見ようと思へば、それも結構なことだとして承認されます。けれども、此の自由が、即ち、生活に無經驗な若い者に一定の標準を指示しないことが却つて若い者の精力を浪費することになりはしないかを私は恐れます。經驗のないことは知る由がない。知らないから無駄をするのは當然なことでありませう。

無干渉主義は産業にも經濟にも虚偽の論である様に、結婚にも矢張り虚偽の論であると云ふ事を私は考へます。青年男女のなま半可な自覺と云ふことが却つて多くの害を醸すものであることを私は考へます。彼等に一定の確固とした標準のないことが彼等を五里霧中に迷はしむるものであることを私は考へます。

現代の經濟上の變化が現代の禍を醸したと人は云ひます。けれども、現代の禍は經濟が根本的理由であるとは私は思ひません。人生觀や結婚觀が誤まつてゐる事、及び、奉仕、自由、幸福、或ひは義務の見方が誤つてゐることは經濟狀態から來てゐるのではないでせう、尤も現代が非常に經濟的に傾いて、ひつつかみ主義的である事は事實ですが。猶太婦人のやうに、且つ又、我が國の從來の婦人のやうに、過去の習慣に全然従ふことが出来なくなつた現代婦人のために確固とした標準、新しい型を、今、即座に造ることの出来ないことは私も認めてゐます。けれども、とにかく、これだけのことは云へると思ひます。

現代の多くの男女のやうに個人的愛、即ち、利己的慾望を主眼として愛を求め、そして、それを永久の幸福の根源にしようとしても、それは結局不幸に終ること。若い人達は確固とした

理想を造らねばならぬこと。若いうちは出來心に支配されるものであるから、其れを警戒せねばならぬこと。個人の自由と云ふこと其れだけで決して幸福は得られないこと。婦人の女らしさは無限に貴いものであること。など。

いづれにしろ、現代は若い婦人にとつては非常に危険の多い時であります。此の時に當つて最も大切なものは理想を造ることです。確固とした理想が出来るならば、若い人達も一時の感情に動かされるやうなことはなく、利己的な結婚や、便宜上の結婚などをしないやうになり、結婚のうちに深い意義を見出すやうになりませう。猶太婦人が男子からも種族からも無限の尊敬を受けて、そして、彼女達自身も幸福であるのは彼女達の理想が義務の上にあつて、そして彼女達の結婚觀が宗教的であることに原因してゐることを私達は考へなければなりません。

猶太人の家庭は實に理想的なものであるにも拘らず、猶太人種は社會から非常な迫害を受けてゐたために、社會を蔑視するやうになつて、其の善良な家庭の影響が社會に及ばなかつたのは遺憾なことではありますが、とにかく、彼等自身同族のうちには満足があつたのです。

過渡時代に遭遇した現代人は社會的に、種族的に、殊に責任が重いものであることを私達は

今自覺しなければなりません。なぜなれば、下手にまごつくと、現代は先人が何百年何千年かかつて築き上げて来た有形無形の富を無に歸してしまふことになります。もし、さうしたなら私達は次代に對する反逆人であります。私共の子供は私共夫婦のものではなく、全體としての人類のもの、小さく云へば國家のもの、そして、先人達が殘して行つた富を受け繼ぐものであることを私達は悟らなければなりません。

其處で、私共は戀愛の自由を主張すると同時に、戀愛の種族に對する義務、自由に生れた戀愛は必ず立派に成長させ、それが夫婦の同情と脱け變る迄完成を期する覺悟がなければなりません。夫に對する獻身、勿論、夫の幸不幸が一ツにかゝつて自分にあると云ふことを理解してそれから家庭に對し、子供に對し——まだ生れぬ子供に對して迄も——獻身的精神を養はなければなりません。

現代に於て、ますます其の流行を大きくして行く俗悪な自己中心主義、子供を邪魔物にして、戀愛と結婚を自己満足の具に供しようとする風潮は、自己を害し、種族を害し、國を亡すものであることを私は憂へます。新時代の婦人は何は置いても先づ戀愛と結婚の社會的意義を悟ら

なければなりません。

第七章 愛・同情・貞操

誰でも自分の配偶者と全く融合した生活を望んでゐます。そして、それは古今東西を通じて同じです。それで居て、實際には夫を裏切る女、妻を失望の淵に陥れる男の数は、盜賊の數よりも多いと云ふことです。此の夫婦の間が圓滿に行かない一つの理由は貧乏にあるとして、英國には『貧乏が戸口に來ると愛は窓から飛び去る』と云ふ諺がありますが、併し、配偶が宜しきを得れば、貧乏は大した問題ではないやうに私は考へます。

貧乏が來たり、或ひは又、其の他の困難が來て生活が苦しくなつても、つまり外界が荒れ、ば荒れる程、配偶者のうちに自分の安住所を見出し得る程、配偶者の眞實を見ることが出来るならば、さう云ふ人こそ貞操を守ることが本當に自然でそして幸福です、さう云ふ人こそ、よし相手が死亡しても其の相手の幻、懐しい記憶が始終胸のうちに一緒になつて居て、再婚と云

ふことは考へにさへも浮んで來ないでせう。

今でこそエレン・ケイの眞價はほとり分りかけて來ましたが、ケイ女史が我國に紹介されて、そして、戀變の自由と云ふことが提唱された時の世間の誤解は矢張り此處でありました。愛の有無を問はず、本人等の意向には頓着なく、其の時の事情に都合がいゝやうに結婚をさせ、永久の同棲を強ひ、そして、夫の死後は其の夫に操を立てさせようとするこの理不盡、不幸、不利益をケイ女史は高唱したのでした。完全な結合を破壊しようとしたのではなく、完全な結合を造るために不完全な無理な不幸な結合を破壊しようとして、離婚の自由、戀愛の自由、再婚の自由を提唱したのです。

併し、夫婦の心身が全く融合して、外界の風浪が荒ければ荒い程、お互ひのうちにお互ひの安住所を見出すことが出來、そして、相手が死んだ後迄も其の記憶に生きて行かれるやうな大きな愛は、愛が生れた最初から存在するものとは思ひません。最初の愛は生れた計りの赤子のやうに非常に其の力が弱いもので、不圖したことに挫け易い、けれども、雨に逢ひ風に吹かれながらもお互ひの細心な注意によつて、育てゝ行つて、そして、始めて、二人の全生活を

覆ふやうな大きな愛となるのだと私は信じて居ます。

若い男女の間に生れた愛は、唯々美しく可愛らしいものであるが、人生のつらい旅を續けて居るうちに、其の愛は同情と云ふものに變形しなければならぬものであることをシュライネルは其の著『夢』(此れは『若き愛と智の目覺』と改題して邦譯致しました)のうちの『歡喜の家出』と云ふ一編のうちによく描いてゐます。其筋は、若い娘が海の縁に坐つて何かを待つて居ましたけれども、娘は自分の待つて居るものが何であるかを知らないのです。するとやがて、自分の肩を靜かに叩いたものがあります。娘が目を上げて見ると其れは一人の異性でありました。娘は自分の待つて居たものはこれだと氣が付きました。二人は抱き合ひました。そして二人の間に生れた愛を『歡喜』と名付けて二人は愛で慈しんで居ました。けれども、或る時期が來た時に、今迄、薔薇の蕾が綻び初めた時のやうに生々と、朝の日光のやうに快活であつた其の『歡喜』は重苦しい目をして手をだらりと下けて居るやうになりました。で、二人は失望してしまつて、互ひに目と目を見合はず勇氣さへもなくなつてしまひました。『歡喜』の姿の變つたことに就て話し合ふ勇氣もなくなつてしまひました。

處が、或る朝、二人が目覺して見ると、『歡喜』の姿が見えませんが、或る朝、二人が目覺して見ると、『歡喜』の姿が見えませんが、つてしまつたのです。二人は暗黒な絶望の淵に沈んでしまひました。そして絶望のあまり、別れ／＼になつて、別な道を行かうとしました。けれども、優しい悲しさうな目をした小さい人が此の時近くから二人を見守つて居て、別な道を行かうとする二人の手を自分の兩手にしつかり握つて、生活の旅に疲れた二人を慰めました。其の人はまめ／＼しく働いて、心の淋しさ苦しさにやるせなく、果ては物狂ほしくなる二人をいたはつては二人の間を繋いで居ました。

やがて、彼等の生活の旅は『反省』と云ふ賢い老婦人の居る處へ行き着きました。そして、二人は、一度彼等が持つて居た『歡喜』を夫つた苦しみを訴へ、どうすれば其の『歡喜』をもう一度探し當て、自分達の手に入れる事が出来るかと尋ねました。すると、其の老婦人が、二人を叱つて、云ひました。『何と云ふ馬鹿な人達だらう。いつ迄目を開かずにお前達は居るのだ。お前達が失つた／＼と云つて探して居る『歡喜』はお前達の傍に居るではないか、お前達を毎日勞つて居るではないか、お前達が始めて出逢つた時、二人の間に生れたものは少しの陰もない輝いた子供、即ち、『歡喜』であつた。けれども、其の『歡喜』の姿は日を経るに従つて

其の姿を變へる。人生の道が追々峻しくなつた時、暗い陰を度々通らなければならなくなつた時、『歡喜』の姿はだん／＼變るのだ。それをお前達は見る事が出来ないのか。今、現にお前達の側に居つて、ともすると離れ／＼にならうとするお前達を繋ぎ、お前達を勞り慰めて居るものは『歡喜』が成長して其の姿を變へたものである。眞面目な、美しい、優しいもの、最も寒い雪の中に居ても温かな、荒涼たる沙漠にあつても勇しい、其の小さい人の今の名は『同情』云ふのだ。それが「完全な愛」なのだ』と、云つて聞かされたと云ふのです。

眞面目な男女の愛は必ず同情に變形して、貧乏に出逢つたり、其の他の困難に遭遇すればする程、二人の結合が強くなつて、つひには未來永劫變らぬ夫婦となつて、本人達の幸福、子供の幸福、延いては、社會の有益な要素となるのでありますが、其の落付いた湖水の上に舟を浮べて遊ぶやうな清福が此の人生にあることを知らない浮薄な人間は、永久にかよわい愛『歡喜』をのみを求めて居ます。そして、其の歡喜には若い血と美が附隨して居なければならぬので、若い血と美を失つた女はだん／＼外の若い美しい女に取かへられてしまひます。ですから、愛の死骸は至る處に累々として居ます。

これは婦人の不幸計りでなく、第一子供の難儀、社會秩序の亂れとなり、且つ又さうする男自身も決して幸福ではありません。婦人の本當の愛、即ち、同情を受けることが出來ず、自然の法則である男女の本當の融合と云ふことを一生涯味はふことが出來ないのでから。『貞婦兩夫に見えず』と云ふ言葉が徹の生えた舊いものとなつたと云ふことは、さうする必要がなくなつた、つまり、今の男のやうな浮薄なものに一生操を立てるやうな馬鹿は今はないと云ふのと同じです。

今迄にも、もう、長い間、操を守ることの不必要が唱へられて來ました。けれども、其れは全然片務的な又は形式的な操を立てることであつて、前にも云つたやうに死んだ配偶者の愛が大きく、其の思ひ出が楽しく、再婚などと云ふことが考へにも浮んで來ないやうな心の状態が美しく、そして、貴くあることは地球が始まつて以來太陽の光りに變りは無いと同じやうに、今も少しも變りはありません。

時々、人生の經驗に淺い、氣まぐれ者が飛び出して、戀愛と結婚は別であるとか、貞操などと云ふことは婦人を束縛しようとする美しい繩であるとか揚言しますが、併し蝶が乙の花甲の

花と飛び歩くやうに若い者の血を吸ひ歩く浮氣者でなく、眞面目な人たちの戀愛は必ず結婚となり、そして、其の結婚は、兩夫にも兩婦にも見えようとしても見ることが出來ないやうな心境に迄精選され、發達して行くやうにお互ひに努力するのが最も高尚な結婚だと私は信じてゐます。

そして、さう云ふ高尚な結婚、及び、生活を爲し得る人は其の素質が既にさう出來てゐるのでありますが、今の世の中には、さう云ふ素質の人が餘りに少ないことを私は悲しむものであります。

第八章 新婦人と男性美

美術がどうの、音楽がどうのと云つた處が男にとつては女程美しいスキートなものはないやうに、女にとつても男程美しいスキートなものはない筈です。『女ならでは世の明けぬ國』と云ふ言葉が何處かにありましたが、男がなくても、矢張り、何處の國でも夜は明けないので。

實に、女は男によつて美化され、意志の力を補はれ、男は女によつて蠻性を制裁され、美化され、精選されるので、人間が進歩の階段を一ツづゝ登つて行くことが出来るのです。女は男の暴れ出さうとし、脱線しようとする性質を柔け慰め、男は女の歩む道の嶮岨な處を平らかにしてやつたり、危険な場所は手を引いてやつたりするので、女には男にない荷物がいつもありますから。

さうして、もちつもたれつ二人の生活を一ツにすることによつて、人の生活は完全になり、進歩することが出来るのです。ですから、男から見た女、又、女から見た男は、善い、悪いの、好きの嫌ひのと云ふ餘地はないのです。各々が各々の半身であるのです。

とは云つても、男にとつては女でさへあれば美しく見え、スキートであると云ふわけではなく、女にとつても男でさへあれば美しくスキートであると云ふわけでもありません。男にとつて、少しもスキートでないやな女があるやうに、女にとつても矢張り少しもスキートでない、頼母しくない、むしろ顔を見ただけでも胸がムカ／＼して来るやうな、不快の化身であるやうな男があります。で、どんな男がさうかと云ひますと、一樣には云へな

くても、先づ、其の種類の代表的なものは、貧乏な貧弱な男でもなく、又虎魚カサゴの様な凸凹した顔の醜男みにくきでもなく、金肥りか、酒肥りか、デブ／＼して居て、重さうに金指環や金鎖をピカピカ光らせて、酒臭い息をふいて、不行儀な傍若無人な態度をしてゐる男です。もし、さう云ふ男が、親子程年の違ふ紅白粉をコツテリほどこした若い妻を携帯してゐる場合には、腹立しい氣持ちにさへなります。

今の多くの女は金のある男に選まれるために、男の歡心を買ふために、自分の美を發揮することを日々の仕事のやうにしてゐます。随分、變な髪のかたちや妙な着物の着かたや、派手な柄が流行したりしますが、それは大部分、女の趣味と云ふよりは、男の低級な趣味が女のさう云ふ恰好を奨励するのです。そして、其の美の標準は、精神的の要素が少しもなく、裝飾の美つまり、物質上の美でありますから、金がかゝります。そして、無自覺な女は其の低級な慾望を満すために、金のある男から選まれるのを女の光榮であると思ひます。男は金で女を自由にするのが男の働きであるやうに考へます。そして、見ただけでも胸がムカ／＼するやうな厭味な男と、胸倉をとつてひつつぶしてやりたい様な意氣地のない女が得意然として並んで居ると

云ふ圖がいくつもく現出されます。

一度は腕力の強いのが男らしいのでありました。今は重に金力が男力であります。腕力乃至金力があれば、男は、それだけで人として不都合はないやうに考へてゐました。ですから、女に對しては日々の動作からも云ひ方迄非常にやかましくし乍ら、男に對しては全く放任してありました。其のたに行儀に關しては、今日猶大部分の男は野蠻人です。男の無作法、其の傍若無人の態度が時々問題になつて、婦人専用の電車を別に出さなければならぬと云ふやうなことが問題になるのは文明國の男子として恥づべきだと思ひます。

行儀は人の行爲の技術であります。つまり、家を美しくするとか、裝飾を藝術的にするとか云ふのと同じやうに、人の行爲を美化するのです。それが、同じ人である女に必要であつて、男に必要でないと云ふ道理が何處にありませう。

大部分の若い女が、男の性格や品行は問はず、金のある者を選んで得意然としてゐるに反して、極く小數の知力の進んだ女や、又は花柳界の伊達者が、金のない所謂優男を（大抵は自分より弱年の）自分で選擇して配偶とするのは、所謂男の腕力乃至金力に對する反抗心からだ

と思ひます。大部分の女が長い間の習慣と云ふ殻に自分の意志も感情も全く密閉されて居る時に、自分の感情の動くまゝに、自分の意志で男を選むと云ふことは痛快事に相違ありません。けれども、もとく反抗心から始まつたことで、其處に道德的な根柢が薄弱ですから、どうしても不健全と云ふ分子が伴ひがちです。

健全な進歩的な生活を營むには、前にも云つた通り男と女が合體して一つになり、そして、其の作用は別で、男には荒い仕事が適して居り、女には優しい仕事に適して居るのみならず、性の作用から云つても、女は早く熟し、そして、早く其の作用が終止するに反して、男は遅く熟し、そして永く其の作用が働くのですから、男は矢張り女よりも筋肉が遅しく、年上であるのが常道です。ですから、女よりも年下の優男は夫として立派な者ではないのです。

何處の國でも一般婦人の夫選みの標準は間違つてゐます。其れを總括して見るなら、米國婦人の金力愛、獨逸婦人の武人愛、又、佛蘭西婦人はグニャ／＼した男を愛すと云ふやうに。けれども、我が日本にも又世界到る處にも一部の婦人があります。彼女達の愛の對照となる男子は、謙讓、公平、眞實、勤勉、秩序の尊重と云ふやうな徳を具備してゐる人です。さう云ふ

徳を持つた男子を得るならば、彼女達は、彼の金力の程度や、身分や職業の如何は皆愛の中へ包んでしまつて、問題にはしないでせう。日に月に目覺めた婦人の數が多くなつて、腕力や金力を振り廻す男が相手にされなくなる日が少しも早く到着することを私は望んで止みません。同時に、男子にも男らしさの標準を變へて頂くことを切に望みます。

第九章 婦人に對する最大侮辱

文字が現代人になくてならぬものであると同じやうに、自然の法則に關する知識も現代人にはなくてならぬものとなりました。

完全な幸福には、完全な健康が根本要素であります。其の健康を保つには、私共の心身を支配してゐる自然の法則に關する知識がなければならぬのです。

無知が殆ど凡ての禍の源となつて居ります。或る程度迄の知識を蓄へて居れば、道德上の、又は生理上の大抵の墮落は防げます。

今日迄、多くの婦人は、結婚生活の倫理的の意義に關しては全く夢中で、母の義務に關する何等の概念もなく結婚を斷行して來ました。そして、避けようとすれば避けられる病氣にひつかゝつて、無駄な苦しみをして居るものが世の中には随分少くありません。

實に、性の問題は、今日まで、普通の人の觸れてはならないものだとして、全く、無知の闇黒裡に閉ぢこめられて居ました。しかし、性の問題は生命の問題です。それが、人の幸不幸を定める根本問題であると云ふことは識者を待つて知られることではありません。抵抗することの出来ない性の能働力が人を善にも惡にも導き、世の中を樂園とも、地獄とも爲すと云ふことは誰でも知つて居る事實です。

けれども、人は、此の點に關しては全く無知の闇黒裡に閉ぢ込められて居たものです。そして、一方には其れを神秘なものだとして崇拜し、又、一方に於ては惡魔だとして恐れ戦いてゐました。

根強い其の力、否、人間の本質的の其の力を、決して、明るみへ出すまいとして人々が努力して居るうちに、其處に恐るべき黴菌が發生し蔓延して、其の禍患の烈しさに世界は今戦慄し

てゐます。そして、性に關する一切を覆うてゐた神祕といふペールや、虚偽と云ふ被覆を引き裂き、取り除けようとする氣運が今世界に熟しつゝあります。性教育の必要と云ふことは一般人の確認する處となりました。殊に、女性獨特の生理上の作用に關する知識を少女に與へず置き置くことは罪惡であるとさへ考へられるやうになりました。

極端な例を舉げて見ますならば、月經と云ふことに就て少しも聞かされたことのない少女が突然の出來事にびつくりして、何でも出血を止めなければならぬ、止めるには冷やさなければならぬと思つて、鹽に水を満たして腰部を冷やして居たと云ふ事です。充分長く冷やして居れば止まるさうであります、併しそんな亂暴な行爲が健康を害さすには置かない、そして一生涯、拭ふことの出來ない病氣を得ると云ふことは餘りに明白です。

昔は、女性の此の生理上の作用を恥づべきもの、つまり、女の罪障だとして教へられたのでありますが、婦人を侮辱するものゝうちで、此の位、大きな侮辱はないでせう。大自然の法則の一つの作用が、どうして、恥であるでせう、罪障であるでせう。これは人生に於ける花、次代と云ふ實を結ぶ貴い準備であり、宇宙の萬物に共通な作用、美しい一つの風景であるのです。

ですから、新時代の母は、娘を無知の暗やみに入れて置いたり、又は、在來の女性に對する偏見を娘の心に植ゑ付けて、娘の心を暗くするやうな愚を敢てしてはならないのです。

純潔の結果の健康は、幸福の源であるばかりでなく能率の源泉です。ですから、少女達は性の意義を出来るだけ高尚に神聖なものだとして頭へ入れられて置かなければなりません。性の意義を低く、動物的なものだとして見、扱ふならば、人間が下等で動物的であるし、これを高尚な神聖なものだとして見るならば、人間が高尚で神聖であることを少女の信仰としなければなりません。そして、少女の心にさう云ふ信仰を造らせようとするならば、まだ、危機のせまらないうちに、つまり、まだ、さう云ふ事柄に關して彼女が虚心平氣で居るうちに、無責任な人の口や巷間に於て發せられる言葉から變な^ちとなつて彼女の頭へ入る前に、正確な知識が、即ち、やがて、彼等は生理的にも心理的にも變化があると云ふことが教へられなければならないのです。

性に關する相當な知識と、一女性として、又、人類の一人として生くべき高き標準を與へられて居るならば、人生の一分岐點に立たされた時に、彼女は自分で自分の行くべき道を正確に

選ぶことが出来ると思ひます。

第十章 自由結婚と見合結婚

従來は肉體だけ夫婦にして置けば精神的夫婦關係は徐々と、後から造られて行くやうに考へられて居ました。それが一つの信仰になつて居ました。ですから、昨日迄、全く見ず知らずであつた男女の二人が、唯、一場の儀式によつて夫婦になり得る、合體し得ると考へて居たのであります。けれどもそれは餘りに人間の精神を無視した亂暴極るものだと言ふことに、此の頃は誰でも氣が付いてゐます。

116

肉體的夫婦關係を造つて置いて、其處から精神的夫婦關係を生まうとするのは全く、當すつぽうであります。精神的夫婦關係、即ち、戀愛の種が二人の間にあるかないかも分らない先きに、其處から芽の出るのを期待するのですから、其處に齟齬の生ずるのは先づ當然と云はなければならぬでせう。

其の當すつぽうがたまには當つて、健全な靈肉合體と云ふ夫婦が出来上がった例も皆無と云ふわけではありませんが、と、云つて、或る程度迄、精神的に目覺めてゐる現代人に其の冒險を強ふることは不條理であり、彼等の耐へきれないことであります。

一口に現代人と云つても、其の内容は千差萬別であります。女大學式に賢母良妻主義を奉じてゐる人もありますから、さう云ふ人にとつては、其の結果がどんな悲劇に終らうとも、所謂媒介結婚か、或ひは、一寸逢つたゞけで直ぐ纏る一目結婚で何等の不都合も感じないで居られませうが、時代に相應した人達に對して従來の方法で結婚をすゝめることは其の人に對する大なる侮辱であります。

117

亞米利加で私は永い間仕立屋へ通つて働いて居りましたが、其の時、矢張り其處に働いてゐた娘は米國生れの伊太利人で十七歳でありました。或る時フト結婚の話が始まつた時に、其の娘は『私にはハズバンドがある』と云ひました。まだ仕立屋の給仕のやうな仕事をして居て、其處に居る一同が子供扱にして居た其の娘の言葉に皆喫驚しました。そして、『そんなにお若いのによく父母が承諾しましたね。』と問はれて、其の娘は『父母の承諾？　へん、そんなものが

いるものですか！ 私は彼を好きしました。けれど、云へば何んのかのと云はれるに極まつて居ますから、私達は二人でコッソリ田舎へ行つて、そして田舎の教會で夫婦にして貰つたんです。なつてしまへば、もう親だつて何にも云ひはしません。それでいゝでせう。」と、實に、平氣なものでした。そして其れを聞いた一同は彼女の結婚生活がいつ迄續くかと云ふ不安を感じる計りでした。自由結婚も此處に至つては、危険此の上もないと思ふのでした。

ですから、我が國の箱入的も不可なら、米國の全然の自由放任も亦不可と云ふことになります。其處で、要するに矢張り其の中庸をとつて行くより仕方がないだらうと思ひます。二十四五歳から上になれば全然本人の自由に任せて置いて差支へありませんが、其れよりも若いうちは矢張り嚴重な監督が必要でし、指導する必要もあります。

個人の自由と云ふことが稱へられて、他からの忠告を、個人の自由を干渉するものだと考へるのが此の頃の流行であります。併し、まだ、弱年のうちは自分で自分の歩む道が分らないものですから、人生の旅に經驗のある年長者が、若い者の歩む道を教へるのは年長者の義務であります。若い者の行く手に見す／＼危険が横はつてゐるのを知りながら、見て見ぬ振りをして

てゐるのは、即つて、不人情です。

で、此れを具體的に云ふなば、矢張り、年長者の監督の下に若い未婚男女の交際を許すと云ふことになります。青年男女の監督者たちが、先づ、あの人なら相當だと見込みを付けた人達をお互ひに招いたり、招かれたりして、交際をさせて見るのが今の場合最上なる方法でありませう。ですから、大體に於ての選擇は本人達の周圍の人がする、併し、最後の決定は本人に任すと云ふことになります。

『見合ひだなんて馬鹿々々しい。そんな舊式な方法で結な婚んかするのは嫌です。』と云ふ言葉は此の頃の娘からよく聞かれます。其の時にいつでも『本當に見合ひなどしなくてお婿さんを選ぶ方法が外にあれば猶幸ひですが、其の機會が與へられてない今日の場合ひでは方法がないですから、とにかく、一度逢つて見て、そして、見込みがありさうだつたら、それから幾度でも交際を續けて見たらいいでせう。見合ひをして、直ぐイエスがノーかを極めずに、其のイエスカノーを三ヶ月でも半年でも、延して置いてはどうです。』と私は申します。なん

つまり、私が今考へ得る最上な方法は見合ひ結婚を改良したものです。他の言葉をもつて申

しますなら、見合ひの期間を双方が満足し安心する迄延ばすことであります。そして、双方の意志が、殊に、娘の意志が何かに壓迫されたり、或ひは強制されたり、又は、誘惑されたりしないやうに、矢張り、年長者の絶えざる監督が必要です。

適當な監督の下に異性ととの交際を許すことは娘の健全な發達のため有益だとされてゐます。そして、それは、決して寂寥をいやすためでも、又病的な好奇心を満足させるためでもなく、異性と云ふものをよりよく了解するためであります。異性と全然隔離されてあることは、異性に對する好奇心を強くし、却つて、誘惑に陥り易く、と云つて、餘り親しくしすぎるならば亂れると云ふ恐れがありますから、其處に矢張り嚴重な境界線がなければならぬのです。

青春に燃ゆる若い男女を無制限に接近させて置くことは危険です。それは丁度、火を弄ばせて置くやうなものです。當人達の氣付かない間に、其の火はお互ひの全身にひろがつて行つて、思はぬ時に爆發して、當人達の日頃の心がけも、又、彼等の未來も破壊されてしまふと云ふやうなことになるります。

戀愛は自分を最も必要とする人と、そして、其の人を自分も最も必要とする、と云ふやうに、

兩者が相合した處に生れねばならず、そして、兩者の生活の標準がほぼ同程度であり、趣味もほぼ合つてゐる處に同情と信用が起ること、それから、又、これから結婚しようとする若い婦人は自分と同じ純潔な體をもつて婚禮の式場へ相手方が出て來ることを要求しなければならぬことを教へられねばなりません。

それでなくても、若いうちには出來心に支配され易いものですから、周圍の者の注意の目を絶對に離すことは本人のために不利であります。無干渉主義は産業にも經濟にも虚偽の論である様に、結婚にも矢張り虚偽の論である事を私は考へます。いづれにしろ、現代は若い婦人にとつて非常に危険の多い時です。舊婦人の理想、舊婦人の生活に従つてゐることは嫌やだが、と云つて、其れに代る一定の理想も行爲の標準もないと云ふ状態でありますから、従つて五里霧中に迷はなければならぬと云ふことになりました。

此の際、若い娘を持つ親、又は、教育者は娘の結婚に先きだつて、一定の理想を娘の心に造らせるのが最大急務です。確固とした理想が娘に出來るなら、どんなに若くても一時の感情に動かされるやうなこともなく、利己的な結婚や、便宜上の結婚などは自分自身でも警戒するや

うになりませう。そして、結婚のうちに深い意義を見出すやうになれば、其の幸福は本人許りではありません。

宗教的な嚴肅な意義を結婚生活のうちに認める事によつて、其の中から結婚生活の幸福は生れて來ます。けれども一時の孤獨を忘れるため、或ひは、經濟上の理由から結婚して、性格の適合も、理想の合致も、献身の精神も、義務の觀念もないならば、其の結婚が悲劇に終るのは餘りに當然なことでありませう。

第十一章 新時代の夫の資格

不具な子供を生むことを非常な恥辱とする風習に對して、子供の時の私は随分無理な注文だと思ひました。誰だつて不具な子供を生みたくはないが、生れるものをどうしようもない、それを世間がもの笑ひの種にしたり、生んだ本人も非常な恥と考へたりすることは誠にいはれないことだと思ひました。處が、其が大いにいはれのあゝことだと云ふことを悟つたのは餘

程後のことでありました。

なぜと云ふに、不具な子供を生むと云ふ不幸事は、絶對とは云へないものでせうが、或る程度迄は人知で避けることが出來ます。つまり、自分の血統に缺陷があつたり、自分自身が病弱であつたりするならば、結婚を遠慮するとか、又は自分の血統が純潔で自分も健康體であるならば、夫を選む際に男の血統と健康を嚴重に調査するとかすれば、先づ、不具な子供を生むやうなことはないと思つても差し支へありません。

けれども、不具な子供を生んだと云ふことは、さう云ふ處に何等顧慮する處がなかつた、つまり、手前勝手な無分別な情慾のために不幸な子供に生を與へ、種族を不純にする罪を犯したのであります。そして、それに對する罰が世間の嘲笑となり、不愍な子に對して一生涯苦しまなければならぬのだと云ふやうに、後に私は考へるようになりました。

結婚は婦人にとつては彼女の全生活であるが、男子にとつては彼の生活の一部分であること云ふことが云はれますが、それは、婦人の生活を劣等視した言葉であります。同時に、結婚を輕視した言葉であります。成程、結婚以外の生活、たとへば、産業、學問、藝術は私共の生活に

價值あるものに相違ありません。けれども、男子の生活は其等の生活に重きを置き過ぎて結婚生活を輕視し過ぎてゐました。『男子は生産者として彼の最善を盡すが、併し、戀人として夫としては少しも努力しない。』と云ふエレン・ケイの小言がある位です。

結婚の意義、及び、其の使命を忘れて物質を偏重する男子は、結婚以外の生活が人間らしい男らしい仕事であると考へるのでありますが、併し、彼等の生活だからと云つて、矢張り、其の中心點は良き配偶を得た結婚生活でありませう。特殊な人間は別として、普通には、たとへ、巨萬の富が出来ようと、世界的に名を成さうと、圓滿な結婚生活がなければ、決して、幸福でないのはどうしたものでせう。

若い獨身者が一生懸命勉強したり働いたりする口實は、學問のためか、又は、事業のためであります。けれども、彼の心のうちには愛人の俤、未來の妻、平和な家庭が其の大部分を占めて居りませう。又、既婚男子の勉勵も、さうする動機はいろいろあるとした處が、其の重なるものは矢張り妻子の生活の安全と云ふ事でありませう。して見たら、男子の生活も矢張り結婚生活が中心であり、それが外の生活の基礎となつてゐるのであります。唯婦人の生活が直接結

婚生活に關係してゐるのに反して、男子の生活は間接に結婚生活に關係がある、つまり直接間接の違ひがあるだけで、要するに結婚生活は男女同じやうに重大であり、幸不幸の別れる處です。

人は何のために學問しますか？ 人類の生活をより向上させ、より幸福にしようとするに外ならないでせう。何のために生産しますか？ 人類の生活資料をより豊富にし、より幸福にしようとするに外ならないでせう。そして、其の人類の基礎は先づ圓滿な結婚生活でなければなりません。

何千年來の人類の經驗が女性には女性の生理心理に都合がいゝやうに、男性には男性の生理心理に都合がよいやうに別な生活の型を造りました。そして、女性は女性たるの特權によつて人間本來の使命に忠實でありました。けれども、男性は物質を偏重するあまり、其の人間本來の使命を忘れました。そして、其處に無數の禍が醸されました。

で、今日の婦人の仕事の一つは其の脱線した男子を本道に歸らせることではありますが、さうするに就いては議論よりも政權よりも、經濟上の力よりもこれから結婚しようとする若い處女

邊の男子に對する態度が最も有効だと思ひます。巨萬の富があらうが、世界的に名を成して居ようが、もし、男が結婚の意義を知らず、子供に對する責任を感じて居ないならば、さう云ふ男は斷然排斥して、結婚上の落伍者にするのです。

全く盲目的に無自覺に世間を見ることが出来ず、將來を考へることも出来ずに、今日迄の無知な女のやうに結婚を自分の生活の全部と考へて居ては困りますが、併し、女性としての使命を自覺した上で、結婚生活を生活の全部と考へることは立派なことです。唯、一口に結婚生活と云へば誠に單純のやうですが、結婚生活を完全に營まうとすれば、エレン・ケイも云ふやうに、其處には種々雑多な事柄が起ります、一日、日を送ると云ふことは何でもないやうで、實際には千差萬別の折衝があると同じやうに。そして、それを一々相當に解釋し、最も適當に處置して行くには、それ相應な理解力、及び、知識が必要です。

ですから、普通一般の人としては男も女も結婚生活を生活の全部とし、其れを圓滿にまとめに行くならば、其れで立派な一人前の人間であります、併し世間にはそれをまとめて行きかねる人間が餘りに澤山あります。そして、そのために面倒が絶えないのです。

若い婦人が夫を選まうとするに當つてはウォルト・ホイットマンの名句

わたしはお前のために生れて來た、お前はわたしのために存在する。

否、わたし達は、わたし達計りのためではなく、種族のために存在する。

お前のうちにつままれて偉大なる英雄と詩人が眠つてゐる。

其の英雄と詩人はわたし以外の男の手によつて目醒まさるゝを抗んでゐる。

と云ふやうな気持ちで自分に對してゐる男子を選むべきであります、しかし、現在の状態にあつては、そんな高尚なことを云つて居たのでは、殆ど、結婚は不可能と云ふことになりませう。ですから、せめては、さう云ふことを理解し得る男子を選むのが最上でありませう。

とは云つても、今日に於ては極く少數だとは云へ、眞面目な精選された人程、戀愛及び結婚の意義を重大視して來ました。そして、浮薄な粗野な結婚を輕視し、甚しきに至つては結婚は單に性慾の苦痛から逃れる一手段だ位にしか思つてゐない男子が、到底窺ひ知ることの出来ない幸福を味つてゐます。さう云ふ男子が一人殖えれば一人だけ、二人殖えれば二人だけ世の中はよくなつて行くのであります。

それに就て、生田長江氏も『婦人解放よりの解放』のうちで、トルストイの言葉を解釋して、『幾人もの異性を愛した人間よりも、たゞ一人の異性のみを愛した人間の方が結局餘計に戀愛の享樂を経験してゐるのだ』と云つて居られます。

第十一章 男子の不貞操に就て

私共が亞米利加から歸る時には同船者が三百人餘りもありましたが、船がいよいよ明後日は横濱へ着くと云ふ日に、其のうちの幾人かが『たとへ二週間でも大海洋の上でかうして運命を共にして來ながら、一たん上陸すれば日本の北の果てに行くもの、南の果てに行く者があつて、いつ又逢ふことがあるやらないやら、ことによるとこれぎり絶対に逢ふ事が出來ないかも知れないから、横濱で皆一ツ處に集まつて別れの盃を取りかはさう』と云ひ出しました。そして其の會の世話役に使われた人達が私の夫をも勧誘に來ました。

『一體、その會と云ふのはどう云ふ處でやるね?』と私の夫は尋ねました。

『さあ、やつぱり料理屋ですわ。』

『僕は料理屋へ行くのは嫌ひだ。』

『併し、日本へ御歸りになつた以上は日本の習慣と云ふものがありますから、さう頑固な事を仰有らないで。』

『料理屋の酒を呑まなければ日本には居られないと云ふなら、僕は此の船ですぐ又亞米利加へ歸るよ。』

と云つて、夫は美事にその世話役を撃退して以來十六年が経過しましたが、まだ、私の夫は一度も料理屋の酒を呑んだ事がありません。かう云ふ氣質の夫と交際する人は矢張りそれに似た氣風をもつた人達です。藝娼妓にたはむれる事を茶飯事と心得てゐるやうな者は語るに足りない人間として、こちらでは排斥しますし、又、向ふではこちらを變人扱ひにしますから、とても交際は出來ないのであります。

妻以外の女に接近する事は殺人よりも大きな罪惡であると考へて居る清潔な空氣の中に長年生活して來た私は、ともすると、世の中にはあまりに不品行な男が澤山あることを忘れがちに

なります。そしてたたく自分の夫の不品行を訴へる婦人に出逢つた時には、『たとへ自分の夫であるとは云ひながらも、今が今迄現に外の婦人と手を引き合つてゐた男をどうして自分に接近させる事が出来るだらう。』と、私は不思議な感じがします。その婦人の心のうちを悲慘と云つてよいか、不見識と云つてよいか、憐れまうか、憤らうかと、私の心は無茶苦茶に混亂します。そして、さう云ふやうに妻以外の女に接近した男を『きたない』と感ずるのは清潔な空氣になれた私の潔癖か、つまり私の偏見であるかしらと考へたこともあります。けれども、それは偏見ではなく、それが正しい見方であると云ふ證據を私はすぐに思ひ浮べるのでありません。

と云ふのは、妻が夫以外の男に關係したり、又は、腕力をもつて犯されたりした時には、その妻はもう汚れた女として、妻として價値のないものとして取り扱はれて來ました。そしてこれを其のまゝ、男に應用しようとする事は餘りに當然なことであらうと私は考へるのであります。

今日迄、虐げられてゐた女を引き上げるために、男女平等な権利の要求の一として男子に女

子と同程度の貞操が一派の婦人論者によつて主張されて參りました。それは差し支へありません。けれども男子と平等な自由を要求して、男がさうなら女もかうすると云ふやうな風もなくはありませんでした。一度山梨縣へ參りました時に、當地方へもさう云ふ風が這入つて來たと云つて教育當局者達が憂へて居られました。その一つの例は其地方で有力な人がしきりに料理屋や待合へ出入りして藝者とたはむれて居ると、その人の奥さんが負けない氣になつて、御亭主の向ふを張つて藝者をあける。すると土地の若い娘達が『あの奥さんはよくやつて下さつた、實に痛快だ』と云つて喝采してゐると云ふのであります。

併し、今日迄、大多數の男が戀愛と結婚を一生に於ける一挿話と見て、云はうやうない不品行であつても、婦人の方が戀愛と結婚を人生に於ける重大事と見て自分の一生の運命を戀愛と結婚に賭すと云ふやうな意氣込みがあつたので、次代のためになくならない家庭を不完全ながらも支へて來たのであります。もし、婦人も戀愛と結婚に對して男と同じやうな態度に出たならば、一體、家庭はどうなるでせう。従つて國家はどうなるでせう。

人生の半數である男だけか戀愛と結婚を重く見ないだけでも、社會には随分不幸が絶えませ

ん。もし、女が、男と同じ態度に出るならば不幸は通りすぎて、社會の全滅と云ふ事になりませう。女が今の一般の男の態度を真似ることは正が不正に降参する事になるので、そして、不正の上には何にも榮えないのが理の當然であります。

其處で、要は、どうしても男の貞操觀を女の貞操觀に迄ひき上げなければなりません。

私は不品行な男子に反省をうながす一つの手段として、私共の日々の生活上、交渉しなければならぬ人に品行方正な男子を選まうと思ひます。つまり、米も炭も呉服も醫藥も品行方正な人からの供給を受けようと心掛けて居ります。私宅へ出入りする男の方でも、もし、その方の品行が亂れてゐる行跡が擧がるならばその場で出入りを御断りする方針を取らうと思つて居ます。さう云ふやうに考へてゐますから、婦人が選舉權を得た曉には先づ第一に品行方正な候補者に婦人は投票する、もし、さう云ふ理想的候補者が無い場合には婦人の力で理想的候補者を造ると云ふやうな方針を皆様が御取りになる事を私は御勧めしようと思つて居ます。

世間に對してはそれでよろしいとして、現に自分の夫が不品行である場合には、理想としては、又、現に私の實感はさう云ふ夫は全然排斥して、今日迄不貞な妻に對して夫がとつた態度

を其のまゝとつて、斷然離婚すべきであります。けれどもそれは唯私の感情であり、世間にとつては一つの理窟であつて、世間の感情はまだく其處迄來てゐないやうです。又、事情がそれを許さないやうであります。且つ又、不品行な夫を斷然排斥する事の出來ないもう一つの要素があるやうです。例をとつて申すなら、或る自覺したと稱する多少知力的な婦人の夫が其の婦人を差し置いて他の婦人に關係した時に、全く因襲的でない、盲目的でない其の婦人は斷然たる處置を取るであらうと私が期待してゐたに反して、其の婦人は夫が外の女に心を向けて行けば行く程、自分は夫に心をひかれたと云ふことでありましたが、私はそれが一般婦人の心理状態である事を想像しました。又、もう一つには、婦人は全く經濟上の力がないので、止むを得ず泣き寝入りになる場合も少なくない事をも認めます。併し、此處に私共の研究しなければならぬ、又努力を要する點があると思ひます。

男は不貞な妻をまるで弊履を捨ててやうに捨て得るのに、女は不貞の夫を捨て得ないでグズグズしてゐると云ふのは、女に經濟上の力がない計りでなく、一般の空氣がそれを普通の事のやうにして居るからであります。どんなに虐けられても服従してゐるのが婦徳とされて居た其

の氣持ちが女の血の中に喰ひ入つてゐるからだと思ひます。もし、エレン・ケイの『いくらでも替りのある紙幣の贋造が重罪に處せられるのに、かけがへのない婦人の生命にかゝはる程重大な事である計りでなく、其の惡徳が子孫に迄も影響する愛の贋造を何故國家は處罰しないのであらう』と云ふ言葉が多く、婦人の頭にビツタリ這入つて、そして、それが婦人の感情になるならば、昔、婦人が死をもつて自分の貞操を守つたと同じやうに、死んでも不貞な夫との同棲を拒むやうになる、又、さうならなければならぬのであります。

夫の不品行に苦しむ妻は、苦しめられるのは單に自分計りだと思つて居てはなりません。第一、自分と一緒に子供が苦しめられます。又、自分の同性が弄ばされてゐます。夫の不品行は永い間慮けられてゐた自分の同性の敵であると云ふ觀念をしつかり握つてゐなければなりません。女の感情が其處迄進んで、同性相保護し合ふ事によつて、男の放埒はいやでも應でも矯正されて行くと思ひます。

前に述べた通り、死んでも不貞な夫との同棲は拒むと云ふ婦人の意氣が私の理想とする處であります。けれども、さうすると今日の狀態ではかたつばしから十中の八九迄の夫婦者が別れ

なければならぬ事になるでせう。さうなつてもかまはないと思ひますが、併し、すつとゆづつて、もし、夫の不品行が一時的の物であるならば、一應忠告もし、反省もうながして見て、それでもきかずに其の不品行を續けるやうならば、其の時こそ斷然離婚の請求と云ふ事にしなければなりません。

國家が婦人の婦人としての職務、殊に、母の位置にある婦人の重要な任務を認めてゐるならば、不義な男を充分制裁して、母子の生活の安全を第一に計るべきであります。併し今日の處では爲政者それ自身の性的道德が皆怪しいのですから、男の不品行、並びに妻子の難義は見えて見ぬ振りに過されて居るのであります。かう云ふ時でありますから、猶のこと今日の婦人はしつかりしなければならぬのであります。もし、子供がある場合には子供と一緒に餓死する迄も不正な夫との同棲は拒む、腐敗した空氣の中には我が子を置かないと云ふ意氣が欲しいものです。又、其の意氣があれば決して餓死する事はありません。又子供のためにも腐敗した家庭で最高な學問を授けられるよりも、學校の門はくゞらなくとも正しい實意のある母の手で眞面目な生活を味はせた方がどれだけ立派な人間が出来るか知れません。たとへ、一人でも惡習

慣に染まらない人間を造る事が私達婦人の義務であり、又喜びでなければなりません。

要するに今迄社會良心と云ふものが男の不貞に對しては全く鈍感であつたのであります。その鈍つてしまつて居る社會良心を私共はこれからひき起さなければならぬのであります。そして、それには感情の組織が必要であります。理屈計りでは人は動きません。『善人のために死ぬ人は多いが、理知の人のために死ぬ人は少ない』と云ふ言葉がありますが、これは、『善人の云ふ事は人がきくが、理知の人の云ふ事は聞きながしにされやすい』と云ふことであります。善人のためには人が喜んで犠牲を拂つてくれるのであります。これを又例を擧げて云ふなら、夫の不正に泣く婦人が理知に訴へて法律沙汰にするよりも、自分の主義を固執すると同時に夫と離れ、そして、克苦して子供を育て、居るならば、それが即ち善人の行爲で、社會の同情をひき起さずにはゐません。男の不正を憎む社會の感情が豊富になります。

又善と理知とは車井戸の二つの釣瓶のやうな物で、情の方が一杯ならば理知の方が空つほうになるし、理知の方が一杯ならば情の方がからつほうになると云ふ言葉があります。で、今迄社會改良運動が成功しなかつたのは理屈からわり出した物であつたからだと言はれて居りま

す。ですから、今、男の不品行を矯正するに就いても、それに対する社會の感情を豊富にし、それを組織し、權威あるものとしなければならぬのであります。そして、さうするには進歩的思想を社會につきこんで、社會良心を造り直さなければならぬ、これが今日の私共婦人の使命であります。

要するに、社會の改良は社會に道德的の感情即ち社會良心が漲つて來なければ成功しません。そして、有効な社會良心には二つの要素があります。その一つは權威ある保守的な過去尊重と、そして、もう一つは批評的な因襲破壊的な、未來を目的とする理想であります。

第三編 婦人との教育

急進的なデモクラシーの精神は社會の單位を家庭に置かずに、個人に置きます。其の結果、親と子を同じ平面の上に立たせます。そして、家族の結束の力を弱くしました。家庭のうちに、又、子供のうちに投げ込まれた其の自由の精神は有益な結果と同じやうに、有害な結果をも齎しました。子供を崇拜する氣風が家庭のうちにも國家にも出来て、そして、裕福な家庭の子供は春の野に咲く花のやうに家の内外を輝かすと云ふやうに費まれました。と、同時に、さう云ふ風に崇められ、大切にされる子供は大抵早熟で無遠慮な人間になります。最大限度の自由を與へられながら、其の自由を活用する訓練を缺く結果は往々悲劇の生れとなります。もし、それが女子である場合には悲劇は一層大きくなります。急進的なデモクラシーの精神は久しい間の因襲的な家庭の習慣や、家長の跋扈から家族のものを解放するには充分でありませうけれども、併し、自由に伴ふ重大な責任觀念を子供に注入しようとする空氣が家庭のうちに缺けてゐるために、折角の解放も放縱の養成所になつてしまひます。

第十三章 新社會の教育方針

今日の政治生活が停滯して居ると云ふ事實は世界到る處皆同じであります。そして世界の資本家と勞働者は戦争の状態にあります。國民はお互ひに喉の切り合ひをして居ります。何故でせう？

人間がまだ如何にして共同すべきかを知らないからです。共同することによつて幸福を得る術を知らないからです。其處で、二十世紀の仕事は眞の共同の原則を發見することです。二十世紀の教育は共同の精神を養成することです。

そして、其の方針の教育は搖籃の中から始めなければならぬ。搖籃の中から始めて、子供室、幼稚園、學校、遊戯、其の他あらゆる人間の活動を通じて、共同の精神の涵養につとめなければならぬのです。國民としての義務は毎日の出來事からも、社會政策からも、又は政府からも學べるものではない。それは、生活と活動の方法を通しての外得られるものではないの

です。自分は一國民である、社會の一部分であると云ふ社會的自覺を造らせることが學校の目的、集會の目的、家庭生活の目的でなければなりません。つまり、私共人間の生活は相互依屬であると云ふことを兒童の頭腦に刻みつけるのが教育の目的でなければなりません。

教育の目的は共同生活に或は社會生活に適した人間を造ることであり、ですから、あらゆる考へられ得る共同的方法が此の目的を達するために學校に於て用ひられなければならないのです。學校に於て、團體生活に對する自己の責任、即ち、團體的行爲を實行によつて學び、そして、自治制の階段を學ばなければならないのです。各兒童は他の兒童との關係、社會に於ける自己の位置を教へられなければならない、毎日毎時間の相互關係を教へられなければならない、一言で云へば、今日迄の學校に於ては他の兒童を凌いで自己が優等な成績を挙げようとするのであつたのに反して、今後は、學校に於ける成功のしるしは他人と共働爲し得る能力が出来たかどうかでなければなりません。

そして、其の能力を造るに就いての訓練は凡ての學科を共同的利益を根本として生徒を組織することが最も利益だとされてゐます。つまり、各生徒の努力を平等關係にうまく配當し、共

働して學課を學ばせられることが最も有効だとされてゐます。

各生徒は自分の考へは他の生徒の考へとは違つてゐるものと云ふこと、従つて、自分の意見を云ふことは他人の考へを豊富にするのが目的だと云ふことを教へられなければならない。眞面目な自分の考へを云ひ現すことによつて同級生計りでなく、先生の考へに迄も或るものを附け加へることが出来る。そして、其の生徒の一人が御互ひに利益し合ふことが出来るのです。そして、かう云ふことはどんな小さい子供にでも出来ることです。

或るたつた六才の子供が母に連れられて繪畫展覽會に行つて、モナ・リザを見た時に、其の繪に就いてどう考へるかと問はれて、其の子供は暗い顔して『此の婦人は小さい子供を可愛がるやうには思へない。』と云つたさうです。そして、これは確かにモナ・リザの批評に或るものを附け加へたと云はれて居ます。

兎に角、子供は自分の考へを云ひ現すと同時に、他の子供の意見も尊重しなければならないこと、自分の考へは大きな眞理の一部に過ぎないこと、凡てが合同して、始めて其處に一ツの、まとまつた考へが出来上がることを教へられなければならないのです。そして、集會的に學ば

せることが集合的考察の訓練になるのです。なぜなら、それが一つの全と云ふものを各生徒が造りつゝあると云ふ感情を各生徒が持ち得るからです。いろ／＼違つた意見が出て、論議されて、そして、ま、ま、つて行くからです。其のために或る生徒は餘分なものを讀みもするであらうし、新しいことを調べもして知識を多くして行きます。かくして、生徒は毎日の課業に於て、又は、他の學校との競技に於て、自分達が全部の一部であると云ふ義務、及び、喜びを持つことが出来ます。

今日迄の教へ方は一人の生徒が他の生徒を手傳つてはいけなものでした。けれども共働生活の基礎を造るための新しい教へ方では各生徒がお互ひに手傳ひ合はなければならぬのです。もし此の新しい教へ方に競争があるとすれば、其の競争は、共働の知識に自分の分け前を出るだけ多く出すことです。云ひかへれば手傳ひ合ふことの競争です。ですから、生徒は自分の出したものに對して責任を感じます。のみならず、全體としての課業が價值あるものとなります。そして、各生徒が其れに對して無頓着では居られないと云ふことになります。そして、其れが習慣になつてゐる結果は、學課に關してのみならず、其の外多くの學校のうちの活動、た

とへば、或るものを調査したり、特種なものを研究したりする場合に、何時でも集合的基礎の上に其れが整へられます。子供のために調査とか研究とか云ふ言葉は大き過ぎるなどと思つてはなりません。小さい子供は山へ行つても、海へ行つても、直ぐに、獨創的な研究を始めるものです。

ですから、教師は子供のいろ／＼な異つた考へを組み立てることを生徒に教へなければなりません。單獨な考へは有益ではないが、他の考へと連絡を取ることによつて其の單獨な考へが有益になると云ふことを教師は生徒に教へなければならぬのです。昔の博物館は一つ／＼ものを集めて置いて居たに反して、現代の博物館主事は特殊の分類をして集合的の意義を造り出すことを重要と考へて居ると同じやうに、現代の教師は生徒の心を昔風の博物館になぞらへて、唯、無茶苦茶にものを投げ入れるのではなく、生徒の心を有益な仕事場のやうに思はなければならぬと云はれてゐます。

眞面目な意見の交換と云ふことが教育の眞髓であると云ふことに、進んだ人々は氣付いて來ました。つまり、各生徒が持つてゐる考への違ひや、興味の違ひやを並べて整理することの有

益さを人々は認めて來たのです。ですから、討論會と云ふものは大學校計りでなく、あらゆる學校に設置さるべきであると云ふ意見が此の頃あります。其の外、運動俱樂部、合唱俱樂部と云ふやうなものが先進國に於ては、今、發達しつつあります。そして、これ等は單に健康とか、又は、藝術とか云ふ見地から計りでなく、共働生活に必要な社會的課業を學ぶのが目的なのです。

學校の自治制と云ふことは複雑な問題ではありますが、併し、其の目的は生徒のために一種の知的雰圍氣を造ることです。即ち、學校を政府になぞらへ、各生徒が一國民となるのです。そして、其の國民は唯單に法律に従ふのでもなければ、又、唯單に投票して主宰者を選ぶのもなく、併し、各人の最高な理想、各人の精神の發露を共同生活を通じて満足させる。これが本當の實際政治であると云ふことを自然に悟れるやうな空氣を造ることです。

有識な國民としての準備は學校に於て爲されなければならないので、歐米の先進國に於ては、此の學校中心と云ふ運動が既に始まつてゐます。此の學校中心運動と云ふのはどう云ふものと云ふと、いろいろの形式の集團的活動を自治制によつて經營することです。で、其の精神は

私共の意識の中心を私生活から社會生活に引き移さうとするのであります。そして、小團體的活動を通じて大團體的活動の準備をしようとするのです。そして、共通の善のために各人の最善なる努力を注ぐことの準備としようとするのであります。

かくの如き修養を経ることによつて、共同生活の意識が直ちに各人の責任觀念となります。今日に於ては、如何なる人間も共同生活、即ち、社會生活を逃れることは出來ないのであるから、自分は社會にとつてどれだけの價値があるかと云ふ質問を始終頭の中に置かなければならないのです。其處で、學校中心運動の目的は國民の心のさう云ふ状態を生み出すことを目的とするのです。

其處で、要點は、私共の各行爲、私共の仕事、私共の家庭生活、私共の要求する娛樂、私共の讀む新聞の種類、子供を生み育てること、それ等が皆私生活に屬するものだと思はれて來たに反して、併し、それ等が社會其のものを造つて居るのであるからして、それ等を社會的行爲と考へなければならぬ、社會的行爲とは直接社會に出て働くこと計りでもなく、選舉する時計りでもなく、政治的の會合に出席する時ばかりでもなく、私共の毎日の生活のあらゆる行

爲が社會的行爲であると見られなければならないのです。各人の情操がさうなつた時に、今日のやうに國民同志がお互ひに喉の切り合ひをするやうな馬鹿氣な悲惨事は止むでありませう。

群集哲學、群集政治、又は、群集愛國主義は最早役に立ちません。動物のやうな群集の力は唯社會を騒がせる計りです。其處で、其の群集を組織することが政治に於ける新しい方法でなければなりません。又、群集の組織は未來の産業組織の基礎であります。國際政治の土臺であります。私共が今盲目的に求めてゐる新しい世界は群集を組織することによつて得られるものであります。組織ある團體から創造力は生れます。團體生活の活動から創造力は進歩して行きます。

二十世紀の教育は此の創造力を完全に導かうとするものでなければなりません。

第十四章 婦人と社會奉仕

今日迄の婦人論者、即ち、第一期の婦人運動者が強敵として戦つて來たものは因襲の力でありました。婦人を其の因襲の力の範圍外に導き出すことであり、そして、それを妨げようとする輿論を打ち破ることでありました。大多數の婦人の人格がゼロであつて、婦人は全く男の要求通りに男の必要を満すために自身をこしらへて行かうとつとめてゐる其の意氣地のない態度を矯正しようとしたのであります。歐米に於ては、それは、既に過去の仕事でありましたが、我が國に於てはまだくこれを現在の仕事としなければならぬ理由が澤山あります。そして、女に對する男の其の要求と云ふのは何かといふと、それは、いろくの名によつて現れては居ますが、併し、分解して見ると、結局、美と弱と云ふことになつてしまひます。つまり、美しいと云ふことと弱いと云ふことを多くの男は女性に要求してゐます——弱いと云つても、

それが病人を意味するものでないことは勿論であります。男が美を要求すると云ふことは受け取れるが、弱いものを好むなどと云ふことはあるまい、と普通人は云ひます。併し、事實はいつも其の言葉を裏切つて居ります。新婦人協會が治安警察法の改正を請願しました時、前代議士であつた或る法學博士が『婦人からのあの要求は全然正當であるから自分も賛成する』と仰有つてから、又、『けれども、さう云ふことを要求する女を妻にするのはいやだ。』と云はれたさうであります。本當に其の人計りでなく、大抵の男子は口では正々堂々と正しいことを云ひながら、併し、感情はいつも其れを裏切つて、そして、實際には矢張り、なよくした弱さうな理屈などは全く知らないやうな女を要求して居ます。

一般の男は斯くまつたく無人格無見識な弱い女を要求して居るのです。そして、女も、女の親も、男のさう云ふ希望に副ふやうにとめて居るのです。ですから、世間から善良な娘であるとはめられて、そして、あちこちからお嫁の口がかゝるのには全く自分の自由意志と云ふもの、ない懦弱な女になつて居なければならぬのです。

美を要求すると云ふのは男計りでなく、凡ての生きて居るもの、要求でありますから、婦人

が美の發揮にとめることは決して悪いことではありません。けれども、人間と云ふ分子を皆無にして、女性と云ふことを看板にして、異性の歡心を買ふために衣服や髪飾りに全力を注ぐと云ふことは餘りに無見識です。

淫奔な男の要求に應ずるため、不健全な氣分を造るために、おめかしに力を注ぐことや、自由大きく發達することの出来る人格を無理無體に小さく不健全にして置かうとする其の弊害に對して、今日迄の婦人論は極力戦つて來たのであります。

そして、それ等の婦人論者達の努力はいくらかの功を奏して、一部の婦人の眠つて居た能力をよび醒しました。今迄、全く拘束されて居た婦人の能力をよび醒しました。婦人の力に活動の自由を與へ、今迄は單なる消費者であつたもの、寄生蟲であつたものを生産者とし、活氣なき生活に倦み果てたものを元氣あるものとしたには相違ありません。

二

併し、婦人が男女平等の法律上の權利を獲得しても、つまり、國民として解放されても、ま

だ、女性としての解放の仕事が残つてゐると前に申しましたが、實を云ふと、婦人が女性として解放されてゐないと同じやうに、男子も男子として解放されて居りません。云ひかへますと、人道的の立場から又は、社會的の立場から男子が本當の人間になつてゐないことは、婦人が本當の人間になつてゐないのと同じであります。不健全な男子の要求に應じようとする女も奴隸なら、不健全な要求をする男子も亦奴隸です。婦人は外部から、つまり男子から及び社會から奴隸にされて居りますのに反して、男子は内部から、つまり、我れと我が心で自分を奴隸にして居るのです。

男子は財力を所有し、其の時々の氣持ちに従つて女性を弄び、そして、さうすることが男子の人としての自由であるやうに心得て居るのかも知れませんが、人道的の立場から又社會的の立場から見ます時には、女性を弄ぶことは男子が性慾の奴隸になつて居ることであり、又、男子が財力の奴隸になつてゐる場合も決して少なくありません。婦人には自分の意志と云ふものがなく、全然、男子の意志及び外界の事情に翻弄されてゐると同じやうに、男子は男子自身の内部の俗惡な本能に翻弄されてゐるのであります。婦人が男子の玩弄物であると同じやう

に、男子は自身の本能の力にいつも投げ飛ばされてゐるフットボールなのです。

過去の文明の失敗はあの世界大戦争となつて現れ、世界を舉げて人は皆驚きの目を見張り、社會の改造、新文明の建設を冀ふやうになつたのでありますが、實に今、人間は、婦人計りでなく男子も深い眠りから目を覺した處であります。自然（外界）の力や、外敵を征服することが出来ても、自分のうちに潜む其の俗惡な本能の力の奴隸に自分がなつてゐると云ふ處に、やうやく、今人は氣付いて來たのであります。幸ひにして今、人は此の點に目が覺めて來たのであります。併し、まだ、目が覺めただけで、さて、その本能の力をばどう云ふ風に處置してよいか、又、今日迄に蓄へられて來た知識をどう云ふ風に整理すべきか、そして、利用すべきかと云ふ點に就いてはまだ少しも見當がついて居ないと云ふやうな状態であります。

三

或る人はデモクラシーの實現によつて全人類が切望してゐる社會の改造、新文明の建設を計つてゐます。そして、これは可なり大きな勢力となりました。そして、普通選舉、及び、婦人

参政権の要求となりました。普通選挙及び婦人参政権は、いゝの悪いの、正の不正のと議論する餘地はありません。この代議政體が存続する限りは必ず普通選挙にもなり、婦人も参政権を得なければなりません。併し、参政権と云ふものは、一體、どの位、私共の生活に効果をもたらすものであるか？ 又参政権を行使する機關、即ち、政府はどう云ふ性質を帯ぶるものであるかと云ふことも私共は考へて置かなければならないと思ひます。

或る生物學者の話に、動物が、其の進化の過程に於て、骨とか又は貝殻とか云ふものが出来てからは其の進歩は著しいものになつたとか云ふことがありましたが、人間社會も、此の國家と云ふものが出来て、私共の生活に根本的に必要な三ツのもの、即ち、外部からの保護、内部の秩序、及び、團體生活の幸福を計ることが出来たのであります。そして、政府は、國家のこの三ツの仕事をする、いはゞ國家の事務所であります。國家は國民は我々國民のものであり、そして、政府が其の國家の事務所であるならば、私共が、其の事務所の事務を監督するために政權を得て發言權を持たねばならぬことは、あまりに明瞭であります。前にも云つた通り議論をする餘地はありません。

其處で考へなければならぬことは、もとゞ其の性質が根本的には事務所である政府が、私共の内部生活とどれだけの交渉があるかと云ふことであります。つまり、其の事務所が、どれだけ國民の質を改善し得るかと云ふのであります。勿論、外敵を防禦したり、内部の秩序を保つたり、國民が餓えないやうに工夫することも重要な仕事ではあります。重用な仕事ではありませんが、しかし、それが、私共の生活の全部ではありません。私共の個人としての生活に、うちへ盗人が這入らないやうに用心をしたり、餓えないやうに注意したり、家庭内に喧嘩が起らないやうに氣を付けたりすることは、重要ではありませんが、併しそれが生活の全部でないのと同じであります。

つまり、カイバ桶にカイバが一杯あつて、馬の腹はいつもふくれてゐても、其れだけではいい馬はできないのと同じであります。

四

今日の一派の論者はデモクラシーが政治組織の最後の形式だと思つてゐるやうです。前にも

云つた通り、今日の此の代議政治が存続する限りはさうならなければなりません、併し、今の處では世界で最も進歩した國のデモクラシーでも、混亂と、無駄と、嫉みと、利益の攔みどりの修羅場であることを私共は忘れてはなりません。

デモクラシーが文明に貢献する處が大きいと云ふのは嘘ではありませんけれども、其の民主主義が國民を教育し、國民を訓練した上に、猶其の上に利他的本能に支配されるやうになつた時、即ち、大多數の國民の本能が社會奉仕的になつた時でなければデモクラシーは本當に有効ではありません。

五

此處で、私共が考へなければならぬことはデモクラシーが實現して、私共凡てが政治に參與することが即ち、普通選挙が教育的價值をもつて、そして、其の教育的價值が政府の能率に影響し、従つて、社會の進歩となるかどうかと言ふことであります。なぜなれば、國民が無學であつては普通選挙は實行できても有効ではありませんから。そして、これは政府と教育の關係の

問題になります。これを云ひ直すと、文明の見地から國家は國民の教育をするために存在するのか、或ひは教育が國家のために存在するのかと云ふことになつて参ります。或る學者は教育は政府に従屬すべきもので、國民は政府の形式に副ふやうに教育されべきであると云ひ、ナポレオンやビスマルクも此の説でありました。

けれども、現代獨逸の最大なる誇りの一ツは學問の獨立と言ふことであります。もし、學問の自由が神聖なものならば、眞の教育は國家を支配するものであつて、教育が國家に支配されべきものではないと云ふのです。けれども、私は教育と云ひ、國家と云ふものは要するに社會を治めて行く機關の内外のやうなものであるから、教育が國家に従屬するとか、國家が教育に従屬するとか云ふことにはないと思ひます。國家は個人の行爲を保護すると同時に制裁するものであり、教育は個人に自由を與へると同時に、自己制裁を教ふるものであり、そして、この自由と制裁は社會的奉仕の精神によつて調和さるべきものであると思ひます。

ですから、國民は政治に參與すると同時に、其の社會的奉仕の精神を養成されてゐなければなりません。そして、政治に參與する事は其の社會的奉仕の手段であると考へるやうになつて

るなくてはなりません。個人の権利ではなく、團體生活の利益を計るための義務であると考へるやうになつてゐなければなりません。

六

其處で、社會の進歩には、先づ第一に人間の質が變らなくてはならぬと云ふことになります。そして、それは教育に待たねばならぬと云ふ事になります。先年亞米利加から交換教授として來られたデューイ博士は『社會進歩の根本手段は學校である。』と云ひ、又、『國家の力以外には、教育程、社會秩序を保つものはない。』と云つてゐます。併し、教育は、往々其の本來の使命を離れて、社會進歩のために最悪なものになつたり、又は其の時代の悪い精神の反影であつたりすることを或る學者は摘發して『教育は今日の産業無政府状態の現象に對抗し、そして、その力を弱くして行かなければならないものであるのに、却つて、其の悪い現象を反射してゐる。無政府状態の氣分を取り除く代りに、却つて、其の氣分を養つてゐる。同盟休校の如きが確に其の證據である』と云つてゐます。そして、又、

『今日の學校制度は、優等生になることの名譽を誇張することによつて、利己的な精神を教唆することによつて、極端なる個人主義を養ひ、産業界に無政府主義を造り出す準備をしてしまつた。』とも云つてゐます。

昔の教育家は、人間の知識は絶對的なものでなく、比較的なものであると云ふことを忘れて、想像して造つた眞理と云ふものを一かたまりとして置いて、生徒に無やみに暗記させて丸呑みにさせ、自由な討議や、獨創的な意見を排してゐましたから、自然、發見とか新説とか云ふものはくびられてしまつてゐたのですが、併し、新しく起つた經濟上の變動が、舊い宗教的及び保守的の考へを打破して、そして、商業上の戦争や冒險が獨斷主義を許さなくなつたと云はれてゐます。新事實が続出した、めに、教育は教育自身の立場から其の科目に一つの新しい問題を付け加へることも出来なくなつて、社會の要求からのみ、科目を取捨しなければならなくなつてしまつたと云はれてゐます。其の結果、次のやうなパラドックスが出來ました。『教育はたえず産業の進歩の後へついて來るものである。けれども、或る程度からの産業の進歩は教育が導くものである。』と。

いづれにしろ、教育は二ツの性質を持つてゐます。そして、其の一ツは過去の知識と熟練を保存すると同時に次代に傳へて行くものであり、そして、もう一ツは、絶えず新しい地へ持つて行つて、それを適用するのです。

七

そして、教育は教育當局者の性質、又は階級によつて、其の教育の影響に非常な差があるものだと云はれてゐます。たとへば、もし、教育が中流階級に支配されるならば、それは必ず中流階級の習慣を反射しますし、もし、貴族によつて支配されるならば、必ず、貴族の偏見と保守主義が教育のうらに流れます。英國の小説家ガルスウオージが、『英國の公立學校は階級を造る處だ。』と云つたのは此の意味からです。英國の公立學校は宗教家や貴族の勢力の下にあるからであります。

獨逸の學校は柔順な軍國主義の學生を養成するやうに云はれてゐます。と云ふのは獨逸の學校は主として軍人階級が優勢だからです。佛蘭西の學校は社會主義的であると云はれてゐま

す。それは中央教育當事者が可なりの程度に迄、過激な黨派に密接な關係を持つてゐるからです。又亞米利加の學校は女性的であると云はれてゐますが、これは教師の過半数が婦人であるからです。

私立學校は時とすると好ましくない計りでなく、有害な場合が往々あると歐洲に於ては宣告されてゐます。何故なればそれは知識の不平等を來し、又、もう一ツには私立學校は附帶物を多くする弊害があると云はれてゐます。たとへば軍事的に傾きすぎたり、遊戯に重きを置きすぎたりして、一般的知識の方面を害する場面があると云ふのです。

ですから、もし、アメリカのデューイ教授が申しますやうに、社會進歩の根本手段を教育としますならば、私共は教育と云ふ言葉のゆるつたい一般的の意味を、もつと、はつきりさせる必要があります。そして、教育の實質を新たにする必要がありません。

個人を自由にすることが過去に於ける世界進歩の指標インディケータでありました。権利のなかつたものが有權者になり、身分の故に働かされてゐたものが契約で働くやうになり、少なくとも名に於ては各人平等の權利を持つやうになりました。

其處で、前にも述べた通り、此處に猶殘つてゐる仕事は自分から自分を解放することです。今迄は外部の力によつて手足を結へられてゐたことの代りに、今度は各人が自由意志をもつて、自分の手足を社會と云ふ事に結へ付けなければなりません。一個人の幸福の代りに一般の幸福を計るやうにならなければなりません。自分の利益のために社會を犠牲にすることの代りに、社會へ奉公することを喜びとし、名譽と考へるやうにならなければなりません。即ち、社會奉仕の精神を養はなければなりません。そして、其の社會奉仕の精神の完成は社會教育に待たなければなりません。

今迄の教育と云ふ字の定義は大抵、過去の知識の注入、訓練、個人の教化と云ふやうな意味でありましたが、社會教育と云ふ言葉は、勿論、其の個人的な教育の意味に對照させる言葉です。昔の其の個人的な性質の教育に後には生物學上の要素が入つて來まして、環境に順應するとか、選擇とか、中和とか云ふ意味が付け加へられました。これ等の言葉にも社會的と云ふ意

味が含まれては居ますが、併し、社會教育と云ひますと、お互の關係と云ふことに重きを置くのです。同情と共同利益を基礎とした社會を實現することを目的とするのです。云ひかへれば、腕力や疑ひや模倣や、或ひは、自分と云ふものを基礎とした會合から離れて、此の社會を同情と、そして、好意を基礎とした、より精選された會合としようとするのが目的です。

勿論、社會教育と云ふことは社會主義を教へるものではありません。社會主義的な教育でもありません。宗教學校に對する普通の學校と云ふ意味でもなく、倫理的修養と云ふ意味でもなく、財産の平等化を教へるのが目的でもありません。けれども、社會教育と云ふことは、人はいやでも應でも社會的の動物であると云ふことを認めさせることであります。社會的の不調和は結局各人の發達を妨げるものであることを、しつかりと、認めさせることであります。

ですから、社會教育は社會の無駄をはぶき、精神的に物質的に社會の資本を造ることを目的とするのです。其の上に社會教育は、社會問題の解決を目的とすると云ふよりは、一種の健康的な空氣を社會に造るのが目的です。云ひかへれば、社會の各人に、社會的知識と社會的力と、社會的能率と、そして、興味を創造することを社會教育は意味するのであります。故に、社會

教育は學校を普通の知識を授ける外に社會關係を教へる處と致します。そして、其處で未來の社會制度を造る準備をするのです。云ひかへれば、社會教育は特殊な社會關係を造るために一定の有意識な訓練を施さうとするのであります。

社會教育は順應的な依頼心のある人間を造るよりも献身的な人間を造らうとします。つまり、受動的でなく、能動的な社會的の人間を造らうとするのです。ですから、社會教育は一般的でなければなりません。凡ての人に對する機會均等、蓄積された有形無形の財産の平等な分配、壓制的な利己的な關係の代りに、親密な任意な關係を造らうとするのであります。

一言で申しますならば、社會教育とは、社會を自己のために利用することの代りに、社會奉仕の精神を特長とする人間を造つて、平和な社會的共同生活を創造しようとするものであります。

九

この社會教育によつて社會奉仕の精神が養はれて、始めて、社會には本當の進歩があります。

あらゆる變化が進歩的になります。一個人の幸福の代りに、一般の幸福が標準でありますから、世の中は平和であります。處で、今迄述べた此の社會教育を教育の根本精神とすることが出來て、教育法が全然新しくなつたとしても、もし、其の教育を受入れる材料、即ち、兒童が、學齡に達する迄に、其の教育を受入れ得る素質を造つて置かなかつたならば、其の完備した教育法も殆んど無駄になつてしまふかも知れません。そして、其の完備した教育を受ける素質、即ち、材料を造るものは全然母の仕事であります。

私はものを考へるやうになりました以來、民主主義に基礎を持った女權の擴張に常に不満を持つて居りました、社會の平和、社會の進歩には母の愛を押しひろげなければならぬ、子のためには全然自分を忘れる母の愛を人類に植ゑ付けて、人類の本能が全く利他主義になつた時に、即ち社會奉仕の精神が本能になつた時に萬人の切望してゐる平和は實現する。そして、さうするには母の仕事を尊敬しなければならぬ、先づ何は置いても母性の保護が急務であると云ふことを主張して参りましたが、此の頃世間でも、デモクラシーと個人の權利を叫ぶのにもう厭きたのか、それとも、デモクラシーは思つた程有がたいものではないと云ふことを悟

つたのか、やうやく、デモクラシーの反對の社會奉仕と云ふ聲を擧げて参りました。そして、これは喜ぶべき傾向であります。

十

歐米に於ては殆ど其の終結に近づかうとしてゐる婦人参政權問題が、これから我が國に於ては又暫らくの間問題になるのでありませうが、此の婦人参政權問題に就いて一言述べて、此の章を終らうと思ひます。

婦人に迄参政權を延長することは政府の腐敗を矯め、政府の能率を増進する手段だと云ふことは今迄に度々云はれて居りました。併し、今日迄にこれを實行した國の經驗によりますと、其の利益はまだ充分に證明されてゐないと云ふことであります。のみならず、今日の狀態の下では婦人に選舉權があつても政府の墮落が矯正されたり、政府の能率が上がったりと云ふやうな直接な効果は疑はしいと云ふことであります。今日の處では、實は、婦人が参政權を持つても、唯、今迄の選舉人、即ち、男子の有權者に其の有權者よりも一層無學な、一層公の事

柄には無頓着な選舉人の一團を殖やしたに過ぎないと云ふことであります。けれども、婦人参政權はつひには婦人の上に教育上の感化をもたらずであらうことは考へられます。

民主政治である限りは婦人も選舉に加はるのが當然であり、かくして、始めて、民主政治が完全になるのであることは前にも申しましたが、併し婦人に選舉權を延長して國民が男女の區別なく参政すると云ふことが政府の能率を増すと云ふことは、今も云つた通り、餘り當てにならないと思ひます。政府が變化して行く社會の必要に應ずるやうに一層の弾力性をもつて、そして、一層有効に働き得るやうに婦人参政權が役に立つかどうかは疑はしいのであります。なげなれば、普通の國民が政府の仕事の多くに通じてゐないことは明らかであります。殊に重要な事柄に關してさうであります。

十一

政府の重要な仕事のためには、其の仕事に關する特別な知識と、特別な能力と、特別な修養と、特別な經驗を持つた人が必要です。現代は分業の時代であることは誰でも知つてゐますが、

外の仕事に分業が必要であるやうに、政治も分業にして、或る一部の人に任せて置いた方が却つてとくではないかと云ふことを私は頻りに此の頃考へます。民主々義の政府を持つて居る國民でも、公の仕事をするに適した人々に政權の大部分を任せて置いた方が却つて安全ではないかと思ふのです。戦争前の獨逸の文明は先づ都市の文明と云はれてゐました。都市の行政の行き届いてゐたことは歐洲に先づ類が無いものと云はれてゐました。そして、それは各部門が皆専門家によつて治められてゐて、賄賂などの行はれる餘地は全く無かつたからだと云ふことであります。

今日迄の民主々義の政府が無能であつたことは、適任者に政權を委ねて置かなかつたことに原因があると云ふことです。

政治は政治専門の人に、物を造ることは男の手に、人を造る、即ち、子供を育てることは女の手に、それ／＼分業がはつきりすると同時に、各人が各自の使命の深い意義を悟るならば、それが皆社會的であることが明瞭となり、自然、利他主義、即ち、社會奉仕の精神が生れて來ます。そして、其の精神が各自の間を流れるやうになつて、始めて平和な社會、進歩的生活が

確立するものであると私は信じます。

第十五章 女子高等教育と出産率

ダーウインの自然淘汰と云ふのは生きて行くに適した人間が生き残つて、不適當な人間が滅びて行く、つまり、悪氣候、病氣、不完全な生れつき、危険な職業、過度な食慾、及び生殖慾が人間を滅して行く自然の働きを云つたものです。即ち、自然は生存の不適者を排除するのであります。

處が、此處に自然淘汰の外に社會淘汰と云ふのがあります。これは自然淘汰が排除しようとするやうな不適者をいたはつて生存し得るやうにしますが、併し、又、社會的不適合者を排除します。つまり現在の社會に容れ難い人間、即ち、異端を稱へるものや、犯罪人などを殺してしまひます。

社會淘汰はさう云ふ人間を排除しますが、併し、其の外にはどう云ふ人間が生存すべきかは

規定しません。處が、どう云ふ人間が子孫を残していゝかは規定します。云ひかへれば、社會淘汰は生存すべき人間を選択しないけれども、併し、兩親を選択しようとします。ですから、もし、社會が種族を改良しようとするならば、社會は次の要素の一つ、或ひは一つより多くを強くすることによつて其の仕事をします。其の要素とは即ち(第一)は結婚しようとする傾向、(第二)は結婚の多寡、(第三)は婚期、(第四)は子供を持たうとする意志、(第五)は子供を優良に育て上げる能力です。

かう云ふ要素の一つ或ひは一つより多くを強くすることによつて、種族は改良されるのであります。かくの如くにして社會は人間のタイプの意志を基礎としてタイプの區別をします。これに反して、自然は大抵タイプの肉體の特性に、或ひは、タイプの本能を基礎としてタイプの區別をして來ました。

これを詳細に述べることは餘りに大きな仕事で、とても、茲では盡せませんが、唯此處にお話しようとすることは、現代社會の特長となつてゐる選擇の方面、殊に婦人と高等教育に就いてあります。併し、其の前に極く簡単に述べて見たいことが二三あります。

昔の戰爭の一人々々の接戦に於ては、最も勇敢な、最も強い、最も敏捷な人間が適者生存の原則によつて生き残つたものでありますが、現代の戰爭に於てはさうは行きません。機械によつての戰爭でありますから、勇敢も腕力も敏捷も其の身を救ふ役に立ちません。のみならず、選りぬきの優良な青年が危険な戦場に行つて、心身共に虚弱な青年が後に残るのでありますから、優良な男子が子孫を残さないで、虚弱な男子が次代を造ると云ふことになりました。先年の世界大戰爭は大規模に於て其れを實行したのであります。

これと同じやうなことが平和状態にあつても行はれてゐましたし、又、現に行はれてゐます。ローマンキャソリック教育の説教師等は知力の點から云つても徳の點から云つても確に一般人からは優れてゐたのでありますが、彼等は獨身者でありましたから、後へ子供を残しませんでした。これは人類の莫大なる損失であると云はれてゐます。そして、其の證據として挙げられてゐるものは、新教の傳道師等が結婚生活を送つたことによつて世界は科學上文學上非常な利益を得てゐる。世界で一位を占めてゐる科學者、又は、文豪、たとへば、マガシース、ベルゼリアス、エンケ、オイレル、イエネル、リネアス、エマソン、ハラム、オツプス、アディスン、

ベン・ジョンソン、レッツシング、リヒテル、スキフト、タムソン、ウィーランド、及びレン、並びに第二流の無数の學者文學者が新教の傳道師の家庭から出てゐる。もし、新教の傳道師が獨身生活を送つてゐたならば、世界は前述の有益な人物を得ることは出来なかつた。であるから、舊教の説教者達が結婚生活を送つたならば、世界はもう一段の利益を蒙つたらうと云ふのであります。

合衆國の國民教育は五十萬人以上の女教師によつて支持されて居るのでありますが、これ等の女教師の能力と性格は先づ大體に於て、一般婦人よりは優れたものであります。そして、又、彼女達は知力的に道徳的に優秀な階級から出てゐます。處が、教育當局の方針は未婚婦人のみを採用することになつて居りますので、教師としてどんなに優れた腕前があつても、結婚すると同時に教職を辭さなければならなくなつてゐます。ですから、教師として立たうと思へば、どうしても獨身を守らなければならぬわけでありませぬ。

併し、これは教育の立場から見れば都合がよいけれども、人種から見て不利益であると云ふ説が此の頃やかましくなつてゐます。そして小學校女教師に結婚を許せと云ふ議論が盛んにな

つてゐます。優生學の見地から、女教師に成り得る優秀な婦人は獨身の教師になるよりも母になつた方が社會のために遙かに有益であると云ふのであります。

合衆國に於ては、此の頃非常に出生率が低くなつてゐるのです。統計を見ますと、十八世紀に於てはニューイングランドの大學の卒業生のうち結婚しないものは百人のうち僅か二人しかありませんでした。處が、一八六一年から一八七九年の間にエール大學の卒業生は結婚しないものが百人のうち二十人となり、そして一八七六年から一八七九年の間のハーバート大學の卒業生は百人のうち結婚しないものが二十六人ありました。かう云ふやうに先づ優秀な部類に屬する人々の結婚数は追々に減つて來てゐます。

それから、もう一ツ重大なことは婦人の高等教育と出生率の關係であります。合衆國に於ては教育上の問題に就いては今も女子も男子も同じであります。どんな高等學府へでも女子が行けるのであります。米國の大學生の三分の一以上は女子であると云ふ事實は先づ教育上女子も男子も同じ機會を持ち得ると云ふことであります。合衆國では全婦人のうちの四十分の一は大學に居ることになつてゐます。今日の四十人に對する一人は、やがて三十人に一人、二十人に

一人、十人に一人と云ふ比例にならうとしてゐます。なぜなら、女子大學生を出してゐる階級の女子は其の能力に於ては同じでも、早婚の理由で大學へ行く機会を失つたり、父母の奨励が無かつたり、或ひは資金の關係から大學に行けなかつたのが、それ等の障碍は漸々減じて行くのでありますから。

其處で、婦人のうちの優秀な、女子大學生が追々と殖えて行つて、過半数になつたならば出産率にどう云ふ影響があるかと云ふことが、今、大問題になつてゐます。同じ階級の婦人でも大學に行く婦人は行かない婦人よりは少なくとも結婚が二年は後れます。それでなくても、既に大學生を出す階級の娘は他の階級の娘よりは二三年は後れるのでありますから、女子大學生の結婚は他の階級の娘よりは五年後れることになります。其の上に大學を出た婦人の殆ど半分は結婚しないと云ふことであります。これに反して、一般の婦人は十中の九人迄は結婚してゐると云ふことです。

大學卒業生は、又、結婚しても生む子供の数が非常に少なくて平均数は二人、或る大學の卒業生の比例をとつて見ると一人強だと云ふことです。大學生活は女子の生理的の勢力の最も旺

盛な時でありますから、勿論、それが出産率に影響するのでありませう。ですから、優秀な婦人の二十人に一人、十人に一人が大學に行くやうになつたならば、優秀な婦人の子供は益々少なくなつて行くと云ふやうになるのです。そして、平凡な婦人計りが多くの子供を生むことになります。

又、同じ大學の卒業生でも、普通の卒業生は直ぐ結婚するに反して、學業に秀でたものは三年も五年も結婚を延ばすやうになります。教師の試験を受けても、成功したものは結婚を延ばし、失敗したものは直ぐ結婚すると云ふやうになつてゐます。

一體、今の女子の高等教育は女子としての能力の増進と云ふよりも、家庭を去つて社會に出ようとする所謂婦人解放運動の一部分であつて、そして、今や婦人は男子と同等な準備を爲し、男子と同じ機会を求めてゐるのであります。前にも云つた通り、婦人が其れに成功すればする程婚期は後れ、或ひは全然結婚しないことになつてしまひます。

で、優生學者は女子が遅くも二十歳で大學が卒業出来るやうに女子の小學教育を改革するならば、女子が大學へ行くことを大いに賛成するなどと云つてゐます。もし、さう出来るならば、

女子の高等教育は出産に何等の影響もないことになります。

處で、婦人が普通の子供の數を持つやうになると、婦人は職業上、男子と同等に働くことは出来ないやうになります。先づ、一三年目に子供を生むとして、五人あれば、そして、最後の子供が七ツになる迄、自身で子供を育てようとすれば、婦人はどうしても十七年間は家庭を離れることが出来ないといふことになります。家庭の仕事が全然改良されて時間の節約がずつと出来た處が、子供の世話や授乳の仕方には大した改良の餘地があるとは思へませんから、子を持つた婦人が男子と競争し得るとは考へられないのであります。家庭は家庭らしくなく、子供は他人の手に任せきりにして置くのでなかつたならば、婦人の職業は不可能と云ふことになります。

従つて、母態と職業とは兩立出来ない、其處で、天分ある若い婦人は結婚を断念して事業の方に走つて行きます。そして、結婚して、次代を造るものは平凡な女計りと云ふことになります。さうなつては、勿論、優秀な婦人の才能は次の時代へ残らない、平凡な女の子供計りで次の時代は造られると云ふことになります。

其處で、人種の立場から、又社會の立場からは優秀な婦人が職業婦人になるよりも母になることを希望するやうになります。社會は今日の傾向とは正反對に、最優秀な婦人が母となつて立派な子供を澤山生み、二流三流の婦人が教師となり、職業婦人となることを希望します。

優學生、及び、社會は婦人にさう望むのであります。併し、才能のある婦人、知力の優れた婦人は母態を捨て、事業の方に走つて行きます。何故でせう？ 母となつて子供を育て、るよりは、事業にたづさはつてゐる方が社會から尊敬されるからであります。もし、職業を持つてゐるよりも家庭にゐる子供を育て、居る方が社會から多くの尊敬を受けることが出来るならば、優秀な婦人が母態に満足するやうになりませう。そして、婦人自身も子供も夫も圓滿な生活を営み得る計りでなく、人種の利益は莫大なるものでありませう。

併し、それは、社會が優秀な母態の價値を認め、平凡な母態との差違を識別し、さう云ふ母の子供が社會上有利な位置を贏ち得るやうな社會状態になる迄は不可能でありませう。

第十六章 女性の特質と女子教育

人道主義の見地からは、今日の女子高等教育は何處の國でも失敗に終つてゐます。そして、其の失敗の主なる原因は女子を教育するに、唯單に男子の教育を模倣した處にあるのです。人道主義も男子と平等な女子教育の權利を認めます。けれども、其の教育は、男子とは異つた、女子の生理心理に適合した教育、即ち、女性の本能を枯死せしめないやうな、女性の生理的の活力を抹殺しないやうな教育でなければならぬのであります。

それならば、其れはどう云ふ風の教育かと云ふと、今も云ふ通り、女子の生理心理に適合した學課を小學から大學迄課して、女子の生來の性質の發達を計るのであります。紐育には、既に、これを實行してゐる處があります。即ち、家政學、家庭經濟、嬰兒哺育等を完全に教へるのです。確かに、これ等の學課は、青年期に達した婦人にとつては、植物學よりも幾何學よりも古代學よりもより適して居り、より有益であるに相違ありません。

男女共通に教へられねばならぬ學課ですらも、男生徒に教へると同じ方法で女生徒に教へるのは利益でないといふことが發見されました。一九一四年、紐育市の學務委員は、女子の心の發達の順序と其の働き方は全然男子の其れと異つてゐることを發見して、そして、歴史、物理、化學等の別な研究法を女生徒のために工夫しました。男生徒と同じやうな過程を女生徒にとらせることは、いはゞ、音樂に適した子供に繪を學ばせたり、繪かきに生れついた子供に醫學を學ばせるのと同じやうに無駄であることに氣が付いたのです。

或る人が調査した處によると、女子は物理や化學の研究には、例外は別として、男生徒と同じ高い標準には達し得ない。けれども、語學や藝術に於ては多くの場合、男子を凌いで居ると云ふ事です。又、野外運動を恣にするためには男子は随分大きな犠牲を平氣で拂ふのに反して女子は一寸した障礙に逢つても運動の方を捨てしまふと云はれてゐます。女生徒と男生徒は其の趣味に於て、知力に於て、同じではないのですが、併し、其處に優劣があると云ふわけではないのです。ですから、それ／＼異つた方面に、つまり、それ／＼適した使命に従ふことによつて、兩方ともが優劣のない偉大な功績を現すことが出来るのです。

大學に於て、人道主義は男女の學課を益々分離しようとしてゐます。大學に於ては婦人はロマンズの時期に近づきつゝありますが、此の時期に於ける女子は、同じ時期にある男子とは全然心理の働き方が違ひます。男子が異性を愛すると云ふことには益々金を儲けなければならぬと云ふ氣持が附随します。なぜなら、妻子を維持しなければならぬと云ふ義務が起つて來ますから、益々職業に忠實ならしむるやうに彼を刺戟します。これに反して、女子が異性を愛すると云ふことには必ず次代養成と云ふ心持が起つて母性と云ふことの義務を考へ、工場や商店や事務所のあはたしい空氣から逃れようと云ふことを考へるやうになります。

それ故、人道主義は女子のための學校の課目を選定するに當つて、男子のために發達した課目を模倣することの代りに、女子の後の生活に最も効果あるものを發見しようとしてゐるのであります。人道主義は、特別な婦人、又は、不幸な婦人の外は、婦人は皆家庭に入るものと豫想します。そして、妻として母としての必要なものを學課に入れようとしています。

人道主義は普通の婦人には抽象的な學理よりも、温雅、充實した活力がより大切であることを認めてゐます。文法にかなつて書いたり話したりすることの出來ない法學生に法科大學は卒

業證書を與へないと同じやうに、人道主義は病身な女子には未來の母としての卒業證書を與へません。國語を正しく書いたり話したりすることが法律を實行する辯護士に必要缺くべからざるものであるやうに、必ず、次代の母となるべき婦人には健康が第一の社會的義務だからです。辯護士の場合には、病身でも良き辯護士になり得る可能性はありますが、病身な婦人は絶対に善き母とはなり得ないのであります。

人道主義は、又、聰明な母の家庭教育が公立學校の教育に遙かに優つてゐることを認めます。故に、女子教育の主要な課目として教育學と心理學を充分に教授しようとしています。そして、今、女子大學と關係して現れ始めた母の學校を奨励しようとしています。勿論、何かの専門家にならうとする婦人は別ですが、普通の婦人のためには女子大學の空氣を結婚に都合がよいやうにしよ

うとするのであります。女らしい生活、及び、結婚生活に興味を持つてゐない娘だからと云つて、つまり、普通の婦人よりも女らしい處が少ないと云ふ理由で、殊更に、男性らしく教育をする必要はありません。又、さうすることは結局本人にとつても社會にとつても不幸に終ります、生れながらに男らし

くない男の子が少し許り持つてゐる男らしい分子を全く壓迫し盡さうとして態々彼を女學校へ入れる親はないでせう。むしろ、さう云ふ男の子の親は、彼を活潑な青年達の仲間に入れ、男らしい教師を選び、男らしい競技を奨励し、さうして、男らしく育て上げようと苦心するでせう。それと同じやうに、子供の時から女らしくない女の子を益々女らしくなく育て上げようとするのは變なものです。處が、實際には教育者も親達も、女らしくない娘を女らしくなく育て上げようとしてゐます。其の弊害は日を経るに従つてだん／＼明らかになりつゝあります。

教授の家庭に子供があり、圓滿で整頓してゐて、そして、始終女生徒が歡迎されるならば、それは學校の教室よりも多大な教育的價値があります。不幸な家庭、不完全な家庭を持つてゐる教授は、教授として不完全であると同じやうに、女生徒間の風教に有害です。避妊はのんだくれと同じく社會を毒するものであるに反して、健康な子供達が兩親の食卓を飾ることは博士の學位よりも立派です。

女生徒の指導者には家庭の建設に成功した人が最も適當であります。丁度、或る専門の學門の指導者は、其の學門に成功した人でなければならぬと同じやうに。つまり、やがて家庭を

持たなければならぬ女生徒を家庭的の空氣についで置くべきです。かくして、健全な人生觀が女生徒に生れるならば各生徒の利益であるのみならず、社會の利益は莫大であります。

女子大學の成功、不成功は、卒業生の幸福な結婚の数の比例によつて計るべきです。幸福な結婚の数の多いことは、立派な卒業論文が澤山あるよりも有益なことです。ですから、女子大學の學報のうちには、幸福な結婚をした卒業生の位置を、就職した卒業生の位置の上に置き、そして、立派な子供をもうけた卒業生には母性としての博士號を送るべきです。これは獨身者の學者としての學位よりも勿論上に位すべきものです。

女子大學教育は、以上述べて來たやうな方向に發達して行くべきです。かくしてこそ、女子が教育され、ばされる程、女子自身も男子も幸福を増進することが出來、人種は改良され、社會改造の基礎は築かれます。で、かう云ふ種類の女子教育は次の二條件によつて其の目的を達することが出來ます。

一、兩親が娘の學校を選ぶ時に當つて、母らしい婦人によつて管理され、家庭生活と母性の眞意を生徒に悟らせ、しかして、如何なる學課も無用ではないが、併し、婦人としての充

分なる發達を妨げないやうな教授法を用ゆる學校を選定すること

一、公立學校も私立學校も女學校は獨身の教授の代りに、家庭に成功した男女の教授を用ふべきこと。殊に、廣い意味に於ての家政學に重きを置き、常に、人道の見地から學校を經營すべきこと。

等であります。(此の一論文の大意は米國の婦人論者のうちに重きをなすマーテン氏の意見をとつたものであります。大體に於て、私の考へと一致してゐますし、且つ又、今日迄の婦人論の分岐點に立つて新しい光明を投げてゐる處から、これを紹介致しました。)

第十七章 新しい母と舊い母

賢い人と愚かな人との違ひは他人の經驗を利用すると、しないによる處が大分あると思ひます。學問と云ふことは一面から見れば、要するに過去の人の經驗の結晶でありますから、學問があると云ふことは、過去の人の經驗を自分に取り入れて居ると云ふことです。

けれども、個性と云ふことに餘り重きを置き過ぎる現代は、其の過去の人の經驗と云ふことを侮蔑して居る傾きがあります。

因襲と云ふ殻が個性の發達を妨げて居ると云ふ事實も確かにあります。けれども、過去から私共に傳へられたものゝ凡てが個性の發達を妨げる殻であると云ふことは出来ません。其の殻があればこそ、何百年何千年以前からの人類のための寶物が保存され、私共に傳へられ、私共の生活を豊富にしてゐると云ふ事實もあります。

ですから、要は、其の殻なるものが本當に私共の成長を妨げて居る有害無益なものであるか、或ひは其の殻によつて私共の生命が保護され、私共の成長が助けられて居るかどうかを見極める必要があるのですが、併し現代の青年女子は本能に従ふのが急で、其れが面倒なのです。そして殻なるものは其の種類が何であれ、一切が私共の成長を妨げるものだと定めて居ると云ふ風があります。

過去の人の經驗を侮蔑し、過去の人が定めた型を因襲の殻だとして、一蹴し去る現代の青年女子は自分の身に直接ふりかゝつて來る事柄以外のことは無關心で居ります。そして自分は祖

母や母とは別種な人間であるやうな気持ちでゐて、未來に關して祖母や母が注意しようとしても耳を傾けません。

母としての經驗に就ても亦さうです。祖母や母が『お前が子供を持つたら……』と前提してのいろ／＼な注意や教へは非常にうるさいものとしてゐます、そして多くの場合ひ、『私は子供なんか生みはしませんから、そんな事を覚えるのは餘計なことです。』と云つて祖母や母の言葉をしりぞけます。知力階級に屬すると云はれる婦人でも、今の多くの人は、いよく自分の腹に子供がやどる迄、子供に就て考へてゐません。そしてこれは自分の感情を本位として一切を考へる個人主義的傾向の通弊だと思ひます。其の利那に於ては其の人の偽りのない気持ちではありませうが。

けれども、それでは知力のない、經驗を利用することを知らない、動物生活と大差がないと云ふことになります。親の經驗を利用することを知らない雌猫は、自分の腹から子猫が出たのを見てびつくりしてゐます。後には必ず親になると云ふことを考へずに居る人は此の點に關しては猫と同じやうではないでせうか。

古い型の女は新時代の母として價値がないと云ふことは世間の定評であります、それでも彼女達は柔順でありましたから、よく祖母や母の言ひつけを守つて後に母となる練習をしました。勿論、子供の肉體を扱ふ上に於ては、彼女達は子供の精神を扱ふことは知りませんが、子供の肉體を扱ふ上に於ては、自分の子供が始めて出來た時分にヒドクとんなことは致しません。

同じ年頃の婦人でも舊式に育てられた人が小ぎれいにキッチンと子供を始末して居るに反して、幾分新しい教育を受けた婦人が無器用で、子供を持てあまして居る處は本當にいゝ對照だと思ひます。

新知識を幾分かもつた婦人は、皆、母となることを厭ひます。それが自分の個性の發達を阻止すると云ふ理由で。

母となる前に、或る程度迄自分を發達させて置かなければならないと云ふことは勿論であります、併し自己發達のために母となることを抗むと云ふことは、ものゝ本末を顛倒したものであります。

どんなに大聲擧げて經濟上の獨立を叫んでも、母となることを抗んでも、一定の時が来れば大抵の婦人は結婚します。結婚すれば子供が生れます。それは自然の命令です。自然の命令によつて人は必ずさうなると云ふことを知力ある人間は悟つて、そして其の用意をすべきであります。後には母になると云ふことを少しも考へないで、其の時々の感情に従つて行動をとつてゐて、子供が出来てから、急にあはてるのは雌猫と同じで、知力ある人間のすることではないと思ひます。

さう云ふ人は、肉體的には母となつても心に用意がありませんから、いつも子供に先を越されて子供の始末が付かなくなるのです。子供を持たない先きから後には必ず母になると云ふ覺悟を持つて心の用意をして置く人は、子持を持つた晩には此の子は六ヶ月たてばかうなる、三ツになればかう、十才になればかう、と他人の經驗を利用して、いつも、子供の智慧より一步先へ出て居て、子供が其處迄進んで来るのを待つてゐますから、子供を心的に體的に完全に導くことが出来ます、即ち子供の本能を教育することが出来ますが、母になると云ふ心の用意のない人は、子供が生れた時に先づ狼狽へる。子供の方は母の心の状態には頓着なく日増しに、

どんどん智慧がついて行きます。

持つて生れた動物的本能でも何でも無遠慮にズン／＼伸して行く。子供の悪性の芽がもう伸びてしまつてから、母は、『あら、あんな事をした。こんな事をした。』と、あはてて反抗して見ます。けれども發育盛りの強い精力をもつて母よりも烈しく頭を働かせる子供には、にぶい頭の母の力は何の影響もないと云ふことになります。子供はズン／＼其の悪性、悪戯を發展させて行きます。母は追ッかけても／＼追ひ付けないで子供が十才にもなれば、殊に男の子の場合には、もう母の手ではどうにも始末がつかなくなつて、ほうり出してしまつて、すつかり子供の放埒、亂暴主義に任せてしまひます。そして子供が多少理屈でも覺えると『うちの母には何にも分らない』と定評を下してしまひます。そして母と子は全く別な世界に住まなければならぬと云ふ淋しい、情けない状態になつてしまひます。

舊思想の人が新思想の人を忌むわけは、所謂新思想に觸れた人は、理屈を云ふこと計り知つてゐて、實力がそれに伴はないからです。そして實力の伴はない理屈は、大抵半煮えの理屈です。ですから、舊思想の人から見ると、今の若い新思想の人は、手の付けられない生意氣